

[内部主体] 箱式石棺を採用している。石棺の長軸方位はN89°Wで等高線にほぼ平行する。法量(内法で測定。以下同じ。)は上面で95cm×50cm、床面で63×37cmを測る。長軸の寸法の大きな開きは、東側の小口石を斜めに傾斜させたための結果である。深さは45~53cm(床面上から蓋石下面までの深度。以下同じ。)を測る。石棺は向小口石を立て、その後床面に板石を隙間無く敷き詰め、それから両側石を立て込んでいる。そのために床面北側のほぼ中央の小板石は、北側壁の荷重により上方へ端部が持ち上がっている。両側石は若干外開きを呈するものの、ほぼ垂直に近く立て込んでいる。北側の側石は65×50cmほどの玄武岩の長方形の板石を使っているが、東小口との隙間には板石を貼り付けるようにして壁面を作っている。南側壁にも70×50cmほどの長方形の板石を使うが、高さが足りなかったため、掘り方との間隙に30cm程の板石で充填して壁面を作っている。石棺主軸はN84°Wで等高線に平行している。

[蓋石] 三層の蓋石で閉塞されている。上の蓋石は上石を取り除くと現れる。長さ70~80cm、幅40~50cm、厚さ5~7cm程の板状石3枚と、小振りの板石で隙間がないように被せている。下の蓋石は上蓋石と15cm内外の間隙があるが、東側では両蓋石は接するように被覆している。使用された石材は板状の小振りな玄武石で、下部構造である石棺の上面内法(一部小口板、側石と重なる)一杯に被覆し、西側では一部二重に重ねている。

[支石] 3個を確認している。支石1、2はそれぞれ蓋石の上に据えられており、支石3はやや離れている。支石1と支石3の上端では25cmのレベル差がある。

[掘方] 精査は行っていないが、両側壁の充填石材や小口石の状況から、100×70cm程のものと思われ、石棺ぎりぎりの法量である。掘り込み面は石棺上端ぎりぎり、石棺がすっぽりと納まる深さを示している。

[覆土] 覆土は石棺内一杯に充填していた(図版54)。石棺内の覆土は長軸に半截して精査したが、断面図の記載を失念している。覆土は上面から約50cmに小石を含まないさらさらとした精良な明赤褐色砂質土が堆積し、一部木の根の攪乱が認められた。下位の10cmには精良な暗黄褐色粘質土が堆積し、床面となる。

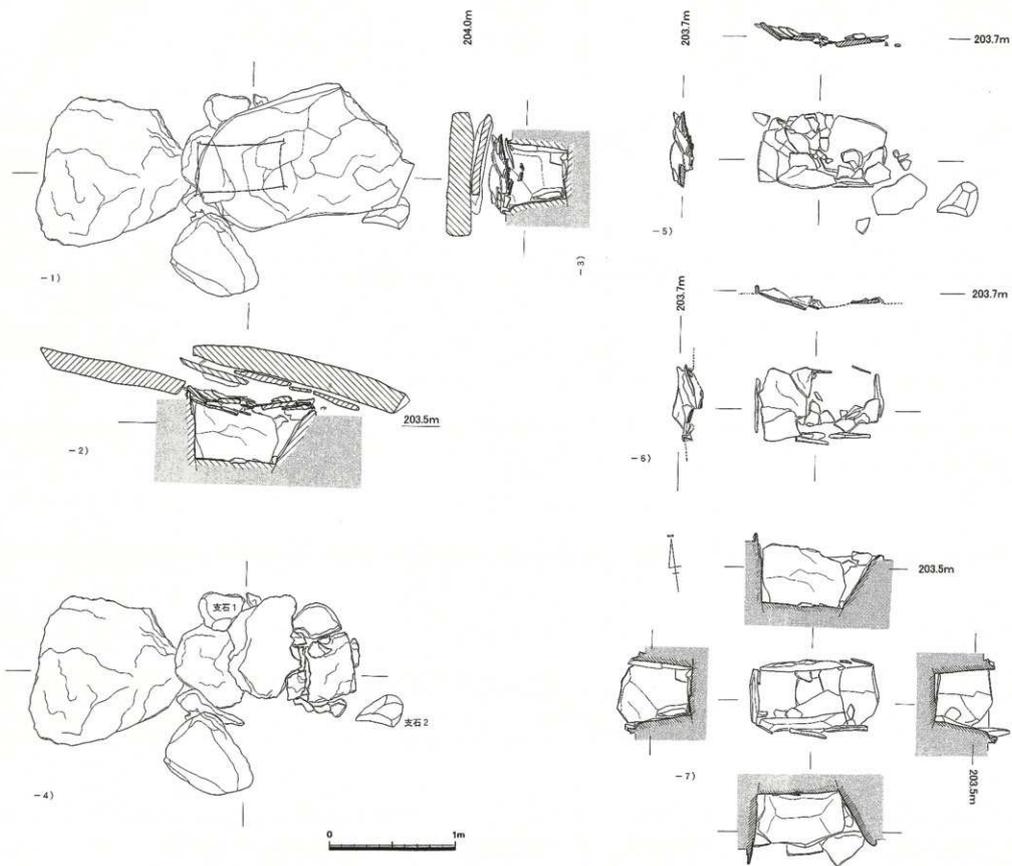
[出土遺物] 棺内覆土中から剥片(第73図147)、結晶片岩裂の原石(第75図179)を確認した。

#### 一6) 29号支石墓(SA2)(第17図、図版10)

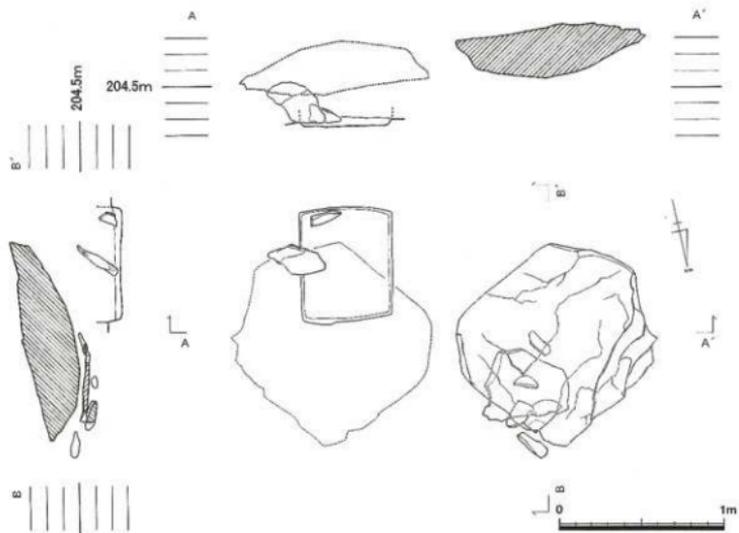
28号支石墓の南西4.6mの位置で確認された。後世の攪乱をかなりの程度受けており、掘方をわずかに認めるのみであった。

[上石] 掘り方の北西1.5mで、上下反転した長さ1.2m、短軸1m、厚さ30cmの亀甲形の石材を確認した。攪乱により半回転されて原位置から遊離したもので、本来の位置に近い状態を図上で復元した。

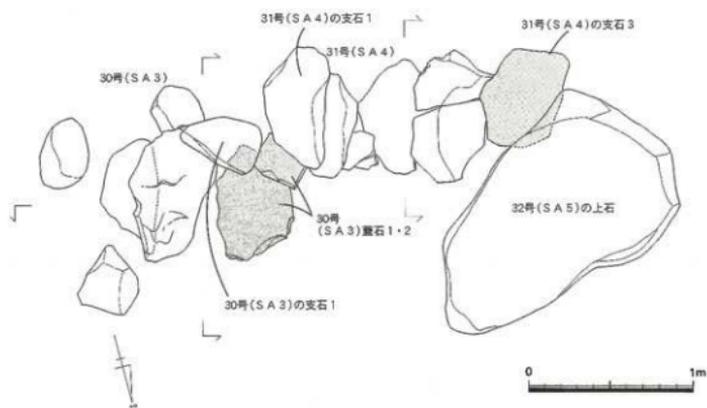
[内部主体] 石棺と思われ、攪乱による小口石、側石、床石ともに抜き去られている。石棺の法量は、わずかに確認された掘り方から長軸70cm、短軸50cm以下である。実測主軸はN78°



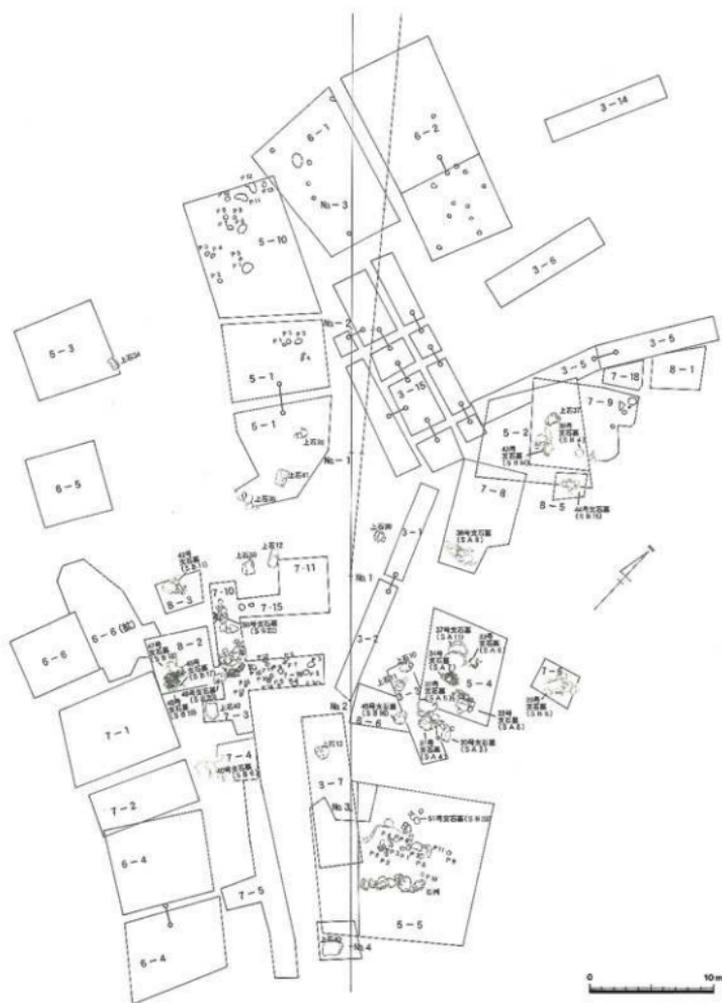
第16图 28号支石基 (SA1) 实测图 (S-1/30)



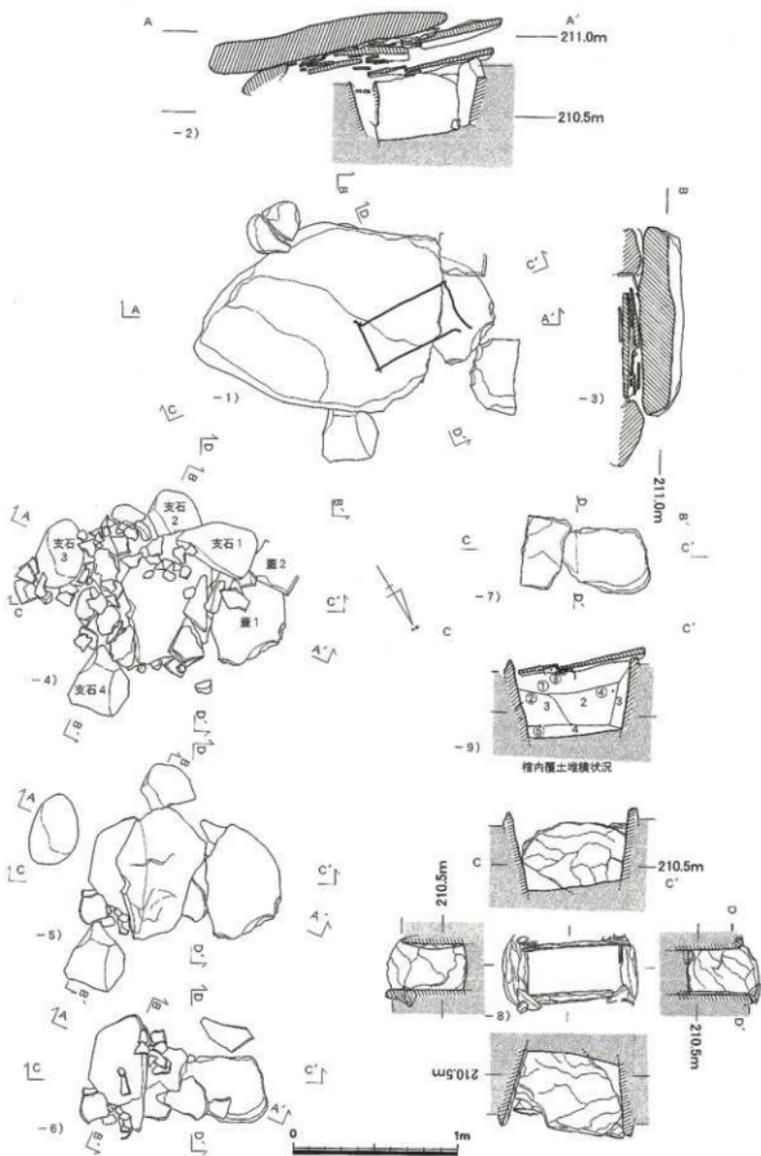
第17図 29号支石墓 (SA 2) 実測図 (S-1/30)



第18図 30~32号支石墓 (SA 3~5) 位置相関図 (S-1/30)



第19図 D地点トレンチ及び遺構配置図 (S-1/400)



第20图 30号支石基 (SA 3) 实测图 (S-1/30)

Wである。

- [蓋石] 攪乱により確認されなかった。
- [支石] 確認されなかった。
- [掘方] 長軸70cm、短軸50cmの寸詰まりの長方形を呈している。
- [覆土] 攪乱により確認されなかった。
- [出土遺物] 攪乱により確認されなかった。

#### 第4項 D地点の支石墓と他の遺構

30号～51号支石墓の23基で構成される。また他の遺構としてはピット群、石列、切込み部、土師器の土壇などが確認され、この地点が埋葬域として使用されただけでなく、生活関連域として使用された時期があったことを発露させた。

##### 一1) 30号支石墓 (S A 3) (第20図、図版11・12、55)

31号・32号支石墓と近接し、33号～37号支石墓と隣接している。実測図は上石の長軸を基本に行ったため、主体部の軸線と異なっている。よって上石、蓋石、内部主体の断面図は変則となっているが(一1・2)、上石、上の蓋石除去後の軸線は、内部主体の長軸線を基本に実測している(一5)以下。

- [上石] 長軸1.5m、短軸1m、厚さ20cmの玄武岩板状石で、略長三角形を呈している。短軸方は水平位に保つものの、長軸方は標高の低い方に傾斜している。蓋石や内部主体である石棺との位置関係からしても、低いほうへ若干ずれている。これは自然営力によるものとも想定されるが、31号支石墓との関係からすると、31号支石墓の支石1を控えて上石を据えるために移動させられた蓋然性が高い(第18図)。即ち30号支石墓の西側の蓋石(蓋1)にさらに蓋石(蓋2)が被せられ、その上に支石1が据えられている。その後蓋2の上に31号支石墓の支石1が据えられ、上石を載せて31号支石墓が完成している。これよりすると30号支石墓から31号支石墓の順序で支石墓が造営されたことを物語っていると見えよう。この上石の北側には長さ1m、幅80cm、厚さ20cmの略長方形の上石用と思われる石材がある。この石材の下には、さらにもう1枚のほぼ同形・同大の石材が存在した。ともに板状石であり、他所から切り出して搬入したものである。支石墓造営用に準備したものとされたため、この2層の石材の下部を内部主体確認のため精査を実施した。しかし、内部主体の確認はなされず、この2層の上石様石材は他の支石墓造営用に準備したものと推察された。

- [内部主体] 箱式石棺を採用している(一8)。石棺の長軸は東西位であり、等高線に直行するように作られている。法量は床面付近で長軸58cm、短軸27cm、上面で長軸70cm、短軸28cm、深さ前後40cmを測る。側石、小口石の組み方は東小口部に両側石端部が小口石内面に接するように、また西側は小口部南側の小口石端が側石内面に接するように組み合わせ

いる。北側壁石端部は西小口石内面に接している。床石は敷設されていない。両小口石ともに上端が湾曲する石材を用い、東側小口石が外方にやや傾斜している。北側石は上端面平坦な板状石を用い、不足部分には補材している。南側石は上端湾曲する板状石を用い、小板石で補材しているが、土壌面が看取される状態である。床面には板石の敷設は認められない。石棺主軸はN79°Wを測る。

[蓋石] 2層の蓋石で閉塞されている。下の蓋石は東小口部を除いて石棺上面を被覆するように2枚の板状石を用いて行い(一7)、その上に東小口部を板状石で被覆している(一6)。さらに80×55cm、70×50cmの2枚の板状石を用いて下の蓋石の合せ部分を覆っている(一5)。石材間の空隙部は小板石を用いて丁寧に被覆して閉塞している(一4)。

[支石] 4個を確認した(一4)。いずれも地山中に含む安山岩の一抱え大の塊石を使っている。石棺構築後蓋石で閉塞を行い、その後蓋石上に支石を据え、上石を4点で支持するように配置している。

[掘方] 石棺保護のため実施していないが、石棺上面での観察では、掘り方は石棺ぎりぎりに掘られており、また掘り方上面も石棺上端とほぼ同じ高さを示している。

[覆土] 一9)に棺内覆土の断面を掲載している。1層は明茶褐色粘質土で、棺外からの流れ込みの土である。2層は1層に層相が似るが、より締まっている。3層は暗茶褐色粘質土、4層は明茶褐色粘質土で2層より粘性がある。2～4層は地山の風化礫を多く含んでおり、石棺内に再埋土されたものである。覆土を高級脂肪酸分析用試料として採取・分析した(第6章第1節参照)。

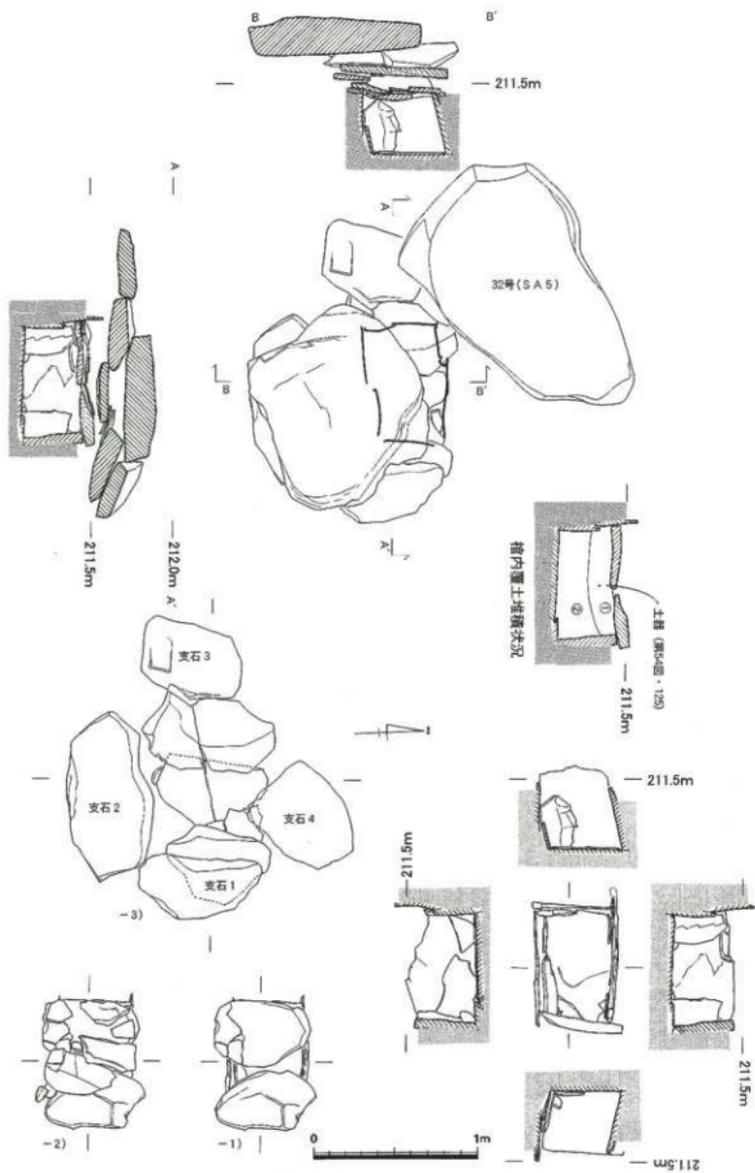
[出土遺物] 一9)に遺物の出土位置・深度を掲載している。棺内から石器3点、土器2点の計5点(一①～一⑤)の遺物が出土した。一①、一②は黒曜石削片、一③は黒曜石製削器(第72図15)である。一④、一⑤は図化不能な土器で、一⑤にはヘラミガキの痕跡を認める。

## 一2) 31号支石墓(SA4)(第21図、図版13～15、55・56)

30号と32号支石墓の中間に平面的、レベル的に位置している。既述したように30号支石墓築造後31号支石墓が作られているが、31号支石墓の支石上に32号支石墓の上石が乗っており、このことにより30号→31号→32号の順序(第18図)で築造されたことが判明した。

[上石] 長軸1.1m、短軸1m、厚さ20cm強の隅丸形状の玄武岩板状石を使用している。上石はほぼ水平位に保たれているが、30号の上石同様、32号築造の折31号の上石も下方に移動されている。

[内部主体] 箱式石棺を採用している。石棺長軸は東西位であり、等高線に直行している。法量は床面68cm、幅36～43cm、上面で長さ68cm、幅42cm、深さ32～35cmを測る。石棺の4壁は北側壁が若干内側へ倒れ込む以外はほぼ垂直位に保たれている。石材の組み方は、南西隅は小口石、側石の端部が接するように組んでいるが、他は石材端面が隣り合う石材の内面に接するように組んでいる。このことから、南西隅の位置を決めてから、即ち西小口石、



第21图 31号支石基 (SA 4) 实测图 (S-1/30)

南側石を掘えてから東小口、北側壁と石棺を組んでいる。東小口部を除く3壁には、壘石の内側にそれぞれ2枚、1枚、2枚の小振りの板状石を立てている。4壁の上面は西小口石が他壁より約10cm強高く作られている。床面には内法全体に板状石を敷き込んでいる。石棺主軸はN87°Wを測る。

[蓋石] 2層に被覆している。1層目の蓋石は、2枚で全体を被覆するが、西小口石が他壁より高いため蓋石が内面に接するようにして両側石に掛け渡し、もう1枚で東小口部を被覆している(一1)。この2枚の蓋石の上に空隙を覆うように5~6枚の小板石で充填している(一2)。2層目の蓋石は、1層目の蓋石から10cm弱浮いた状態で3枚被覆している(一3)。1層目の蓋石より一回り大きい石材を使用している。

[支石] 4個を確認した。長軸上の2個は蓋石上に架かり、他の2個は若干離れている。そのため上石から支石がはみ出す状態を示している。

[掘方] 石材の組み方から長さ1m、幅70cm前後と推定される。掘り方上面は石棺上端とほぼ同じ深さである。

[覆土] 2層に分層できる。1層は流れ込み土で、2層は地山の安山岩風化礫を含む明茶褐色粘質土であり、再埋土されたものと推察される。覆土を高級脂肪酸分析用試料として採取した(第6章第1節参照)。

[出土遺物] 棺内覆土1層中から突帯文の甕(第54図125)が、また黒曜石製石核(第74図168)が検出された。また棺外から突帯刻目の甕口縁部(第52図74)、鉢口縁部(第58図184)が検出された。

### 一3) 32号支石墓(SA5)(第18図、図版13)

周辺の支石墓のあり方から支石墓であることが確実視されるため、調査は実施していない。既述したように、31号支石墓の支石上に32号支石墓の上石が載っており、この地点で最高位に、さらに最後に造営されたものである。

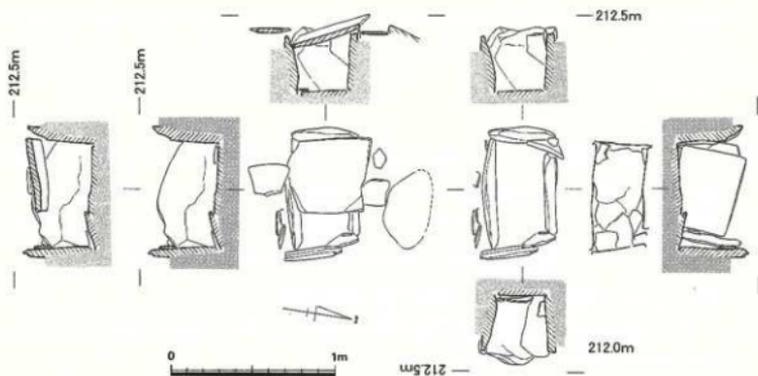
[上石] 長軸1.7m、短軸1.05m、厚さ20cmほどの玄武岩を使用し、ほぼ水平に掘えている。

### 一4) 33号支石墓(SA6)(第22図、図版16・17)

上石、蓋石、支石が破壊された内部主体のみの支石墓である。

[上石] 西隣の34号支石墓の上石と想定した石材及びその下の石材も可能性があるが、石棺との比較からして当支石墓の上石は不明といわざるを得ない。

[内部主体] 箱式石棺を採用している。法量は長軸53~67cm、短軸30cm、深さ35cmを測る。石材の組み方は両側壁が小口石に挟み込まれるように組んでいる。4壁ともほぼ垂直に据えられている。床面は内法全体に板状石を敷設する。東小口部は、小口石の幅が不足したため、縦長の板状石を補材として使用している。北側石は長さ50cm、幅40cmほどの板状石を使用しているが、小口部に空隙を生じたため板状石を補材して空隙部を充填している。



第22図 33号支石墓 (SA 6) 実測図 (S-1/30)

石棺主軸は $N81^{\circ} E$ を測る。

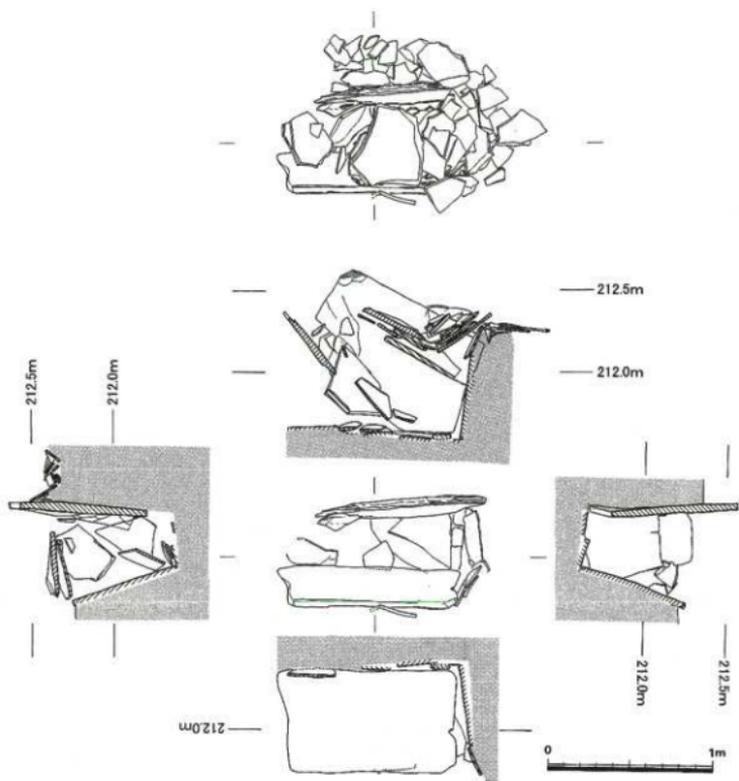
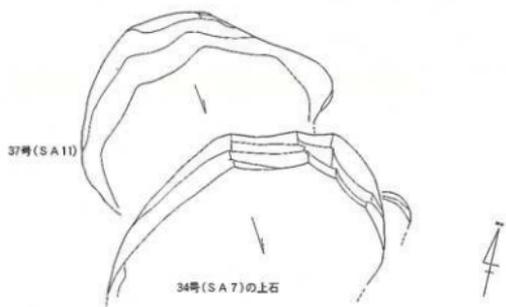
- [蓋 石] 1枚が確認された。両側壁に載り、西側小口石に接するように掛け渡された板状石が確認されたが、他は滅失している。
- [支 石] 確認されなかった。
- [掘 方] 確認していない。
- [覆 土] 床面から30cmほどは安山岩風化礫を多く含む粘質土で、上位は腐葉土層が充填していた。
- [出土遺物] 棺内から土器2点、黒曜石18点が出土したが、遊離している可能性が高い。

#### 一5) 34号支石墓 (SA 7) (第23図、図版17・18)

33号支石墓に隣接して確認された。上石は西方に移動され、また内部主体も床面近くまで攪乱されている。本遺跡確認の支石墓において、内部主体が最も大きく、しっかりとした支石墓である。また、石材を加工して使用している点においても、他の支石墓と異なっている。

- [上 石] 内部主体の北西側1.5m、37号支石墓の上石にもたせ掛けた石材が本支石墓の上石である。長軸1.8m強、短軸1.3m+、厚さ25cm前後を測り、玄武岩の割石を使用している。形状は略円形で上面は平坦であり、かつ下面は湾曲することから、後世反転されたことが理解され、この支石墓の上石と確定した。昭和50年の県調査第107号支石墓樺石◎とされたものが該当する。

- [内部主体] 箱式石棺を採用している。東側石は抜き取りのため斜めに持ち上げられた状態を示し、南小口石は抜き取られている。このため正確な法量は不明であるが、床石や側石から勘案して床面で長さ1m、幅30cm、深さ60cmほどであったと想定される。両壁石は四角に整形された板状石を使用し、小口石も上位で折損しているが長手の板石を使っている。床面には板状石を敷設するが、攪乱により幾分か抜かれている。石棺主軸は $N77^{\circ} E$ を測る。



第23図 34号支石基 (SA 7)、37号支石基 (SA 11) 実測図 (S-1/30)

- 〔蓋 石〕 蓋石である玄武岩板石が石棺内に落ち込み、また西側壁石外に集積されており原位置を留めるものはなかった。蓋石として用いられた板石は大小合わせて100枚前後を数えた。
- 〔支 石〕 確認されなかった。
- 〔掘 方〕 南小口部分を中心に掘り方の検出を行ったが、攪乱を受け確認できなかった。
- 〔覆 土〕 床面近くまで攪乱を受けており安定していなかった。
- 〔出土遺物〕 石器は石棺内覆土より39点、石棺内攪乱部より3点、土器は攪乱部より23点出土した。石器は削片、剥片が主であるが、平基式石鏃（第70図90）が出土した。また土器では突帯刻目の甕口縁部（第52図77）や胴部（第50図20）などが出土している。

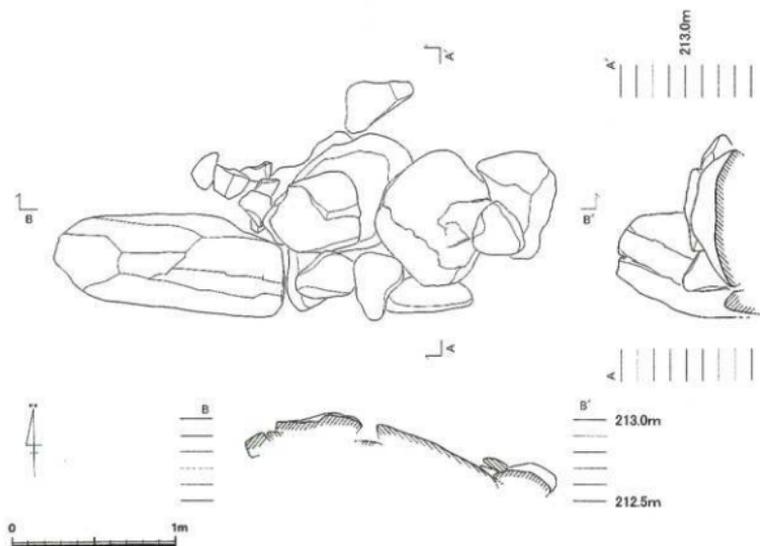
#### 一6) 35号支石墓 (S A 8) (第24図、図版19~22、56、57)

33号、34号支石墓と隣り合う。この支石墓の特徴は、上石の北側から東側に支石墓構築後安山岩塊石を9個半円状に石組みしていたことである。このうち2個は支石として機能している。レベル的には上石とほぼ同レベルであり、上石を据えた後に造作したと想定される。また西側が高く東側を低く石積みしている。35号は33号・34号の支石墓よりレベル的に下位に位置しており、また石組みのレベル差や等高線に交差することから、周囲の土が上石上に被覆しないように、また標石として視認できる機能を維持するために、土留めを配慮した造作と見られる。

- 〔上 石〕 長軸1.25m、短軸90cm強、厚さ10~35cmの安山岩を使用している。長軸はほぼ水平を保つが、短軸が南側に傾き少しずれたことを示している。
- 〔内部主体〕 箱式石棺を採用している。法量は床面で長軸83cm、短軸33cm、上面で長軸91cm、短軸33cm、深さ45cmを測る。4壁はほぼ垂直に近く立ち上がっている。石棺の組み方は石材端部が、隣り合う石材の内面にそれぞれが接するように組んでいる。両側壁は大振りの石材を立てて据え、間隙には外側に板石を使って充填している。南東隅の間隙には小板石を立てて充填している。床面には板石を敷設する。板石は大振りの板状石を2枚使用し、中央で重ねて調整している。よって床石は4壁石を据えてから敷設している。床石の間隙には小板石で充填している。掘り方の床面と床石の間にはわずかに隙間を認める。石棺主軸はN83° Wを測る。

- 〔蓋 石〕 三層に被覆している。下位の蓋石は2枚の板石で4壁上面を覆うように被覆し、間隙部を小板石で丁寧な充填する。上位の蓋石は3枚で被覆して完全に密閉している。
- 〔支 石〕 4個を確認した。4個はそれぞれ対角の位置に、また蓋石上に据えるものが多い。
- 〔掘 方〕 石棺保護のため精査していない。
- 〔覆 土〕 4層に分層できる。1層は周囲からの流れ込み土で、砂質でさらさらした土である。2層は安山岩風化礫を含む褐色土で、さらさらしている。3層は粘性のある茶褐色土で、2~3cm大の安山岩風化礫を含む。4層は3層に層相が似通うが、少し赤っぽい色調を示す。覆土は水平堆積しており、2層以下をうすく剥ぎながら精査を実施した。覆土はすべてポリ袋(35×45cm)に入れて収納し、全部で26袋分であった。2層以下は明らかに





第25図 36号支石墓 (SA9) 実測図 (S-1/30)

土壌を掘削した地山の土を再埋土しており、水洗によって2～3cm大の安山岩風化礫を多く確認することができた。4層及び床石下の炭化物を放射性炭素年代測定試料とした(第6章第2節参照)。

[出土遺物] 棺内覆土中から黒曜石削片、外面貝殻条痕の調整痕を持つ土器(第50図21)を1点ずつ検出した。また蓋石中埋土から黒曜石製の剥片とやや厚手の4Aタイプの石鏃(第69図24)を検出した。

#### 一 7) 36号支石墓 (SA9) (第25図、図版23)

33号支石墓から西へ8.5m、44号支石墓から南へ10mの位置にある。支石墓と見られる集積の西側には大きな安山岩の立石が地表面に見えていた。

[上石] 上石は移動されている。

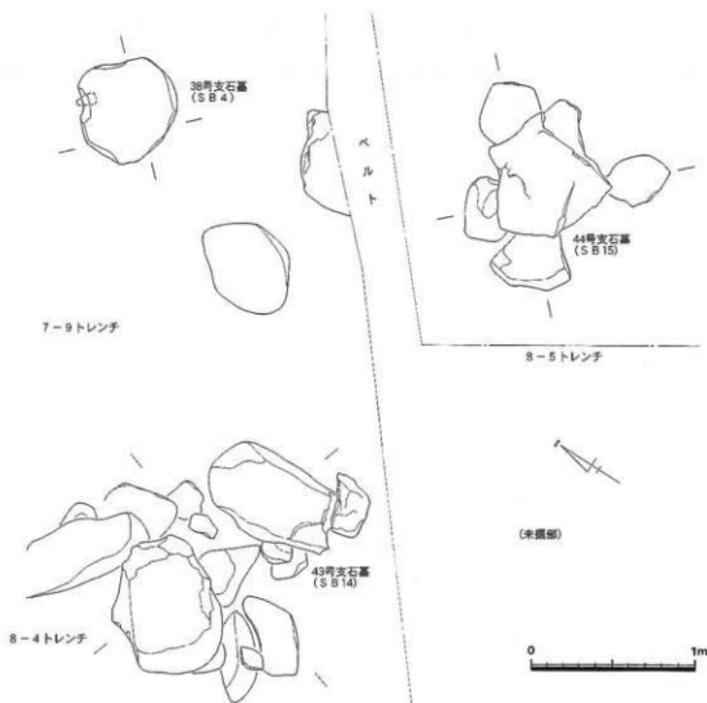
[内部主体] 未掘のため不明である。

[蓋石] 蓋石と思われる石材が3個東西位に存在し、小塊石が周辺に集積している。

[支石]、[掘方]、[覆土]、[出土遺物] は未掘のため不明である。

#### 一 8) 37号支石墓 (SA11) (第23図、図版17)

34号支石墓の上石の下に存在する支石墓である。昭和50年調査の第107号支石墓撐石①とされた上石を有する支石墓が該当する。



第26図 38号支石墓 (SB4)・43号支石墓 (SB14)・44号支石墓 (SB15) 位置相関図 (S-1/30)

[上 石] 玄武岩の板状石で今回は掘り出さなかった。長軸1.62m、短軸93cm、厚さ22cmを測る。34号支石墓の上石同様東側に傾いている。

[内部主体] ボーリングの結果では、箱式石棺と想定される。

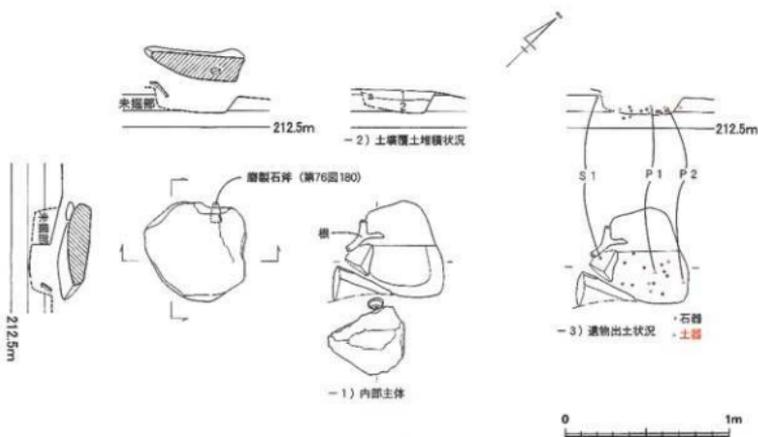
[支石]、[掘方]、[蓋石]、[出土遺物]等は未調査のため不明である。

一 9) 38号支石墓 (SB4) (第26・27図、図版24~26)

7-9トレンチで確認した。隣接して設定した8-4、5トレンチで43号・44号支石墓が確認され、それぞれ3m内に存在している(第26図)。表層土を除去すると安山岩の塊石が現れ、その下に刃部を内側に向けた状態の磨製石斧が確認され、当初デボと想定したが、調査を進めるに従い、支石墓であることが判明した。

[上 石] 径60×60cm、厚さ15cm弱の玄武岩略円形状の上石を使用する。ほぼ水平位である。

[内部主体] 土壌を採用している(-1)。法量は上石とほぼ同じで、径60×50cm、深さ15cm



第27図 38号支石墓 (SB4) 実測図 (S-1/30)

を測る。形状は略方形を呈す。上面でのプランの確認が難しく、深さは上石や出土石斧の関係から見て10cm前後深かったものと想定される。床面は平坦で断面は逆梯形をなす。西側半分は未掘状態で保存した。土壌主軸はN41° Eを測る。

〔蓋 石〕 認められなかった。

〔支 石〕 明確な支石は認められない。

〔覆 土〕 2層に分層できる(-2)。1層は茶色土で肌理細かく若干粘性がある。1~5mm大の安山岩風化礫を含んでいる。2層は灰茶色土で、粘性は1層より弱い。1~2mm大の安山岩風化礫を含む。土壌掘削後の再埋土である。

〔出土遺物〕 他の支石墓に比べて多くの遺物が出土した(-3)。土壌上面から磨製石斧(第76図180)が刃部を内部に向けて埋置された状態で出土し、また覆土中から黒曜石削片や使用痕のある剥片(S1:第72図130)が出土した。

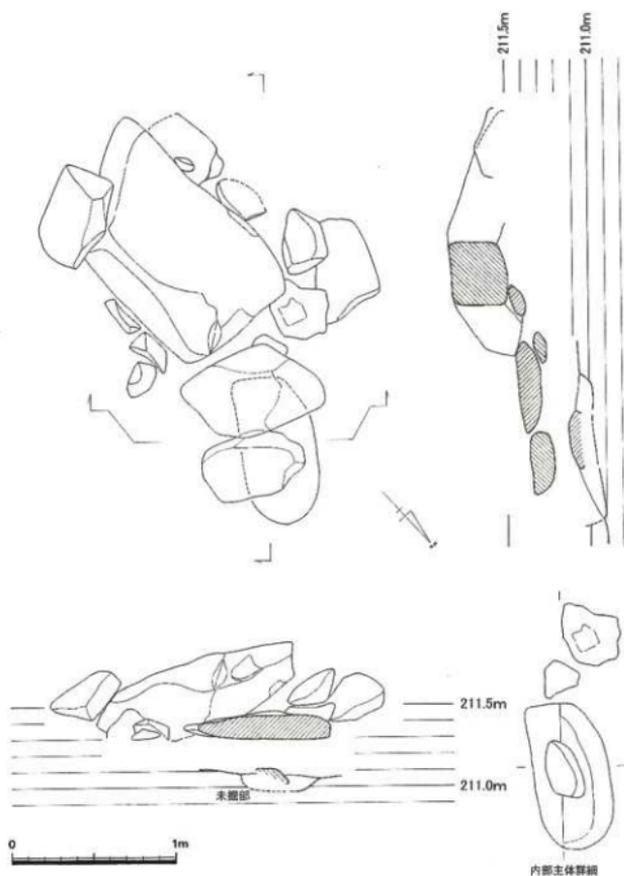
土器は3点出土し、刻目突帯文の甕(P1:第57図175)や組織痕土器(P2:第60図12)が出土している。

#### 一10) 39号支石墓 (SB5) (第28図、図版27・28)

7-6トレンチで確認した。D地点の平坦部から北斜面にかかる所である。支石墓南には大きな玄武岩塊石が存在している。

〔上 石〕 移動したと思われる存在していない。

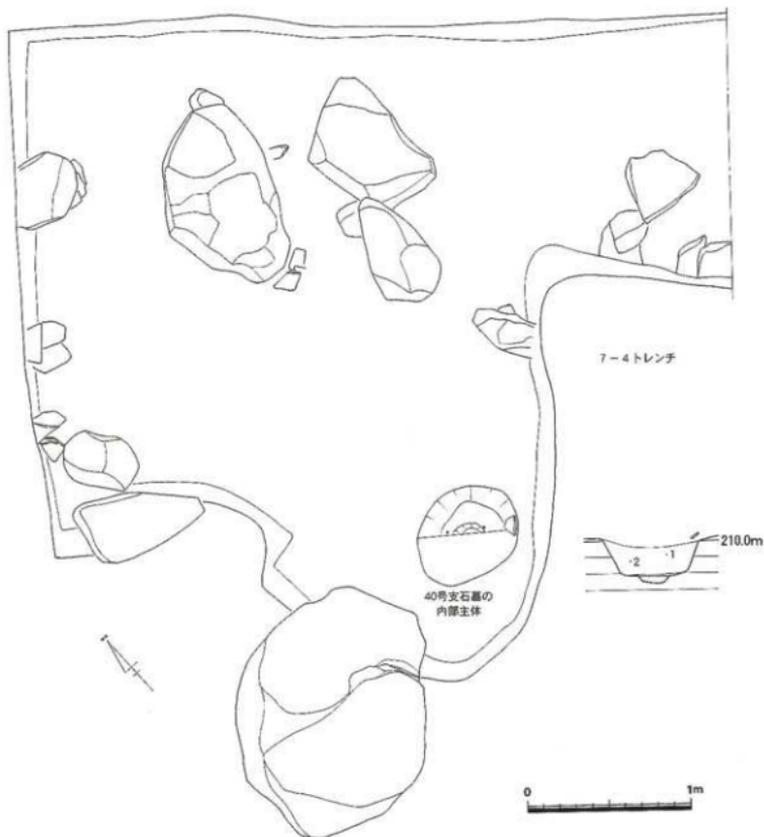
〔内部主体〕 土壌を採用している。法量は上面で径88×45+cm、床面で径78×20+cm、深さ10



第28図 39号支石墓 (SB5) 実測図 (S-1/30)

cm弱と極めて狭小である。深さは掘り方が削平された模様で、東小口部は痕跡程度に確認されるのみであり、本来はもう少し深かったと思われる。土壌中央部に20×10cm弱の塊石が埋置されている。土壌主軸はN43° Eを測る。

- [蓋 石] 2個が被覆している。ともに安山岩塊石で土壌を覆うようにほぼ水平位に保たれている。
- [支 石] 確認できなかった。
- [覆 土] 淡褐色粘質土で、安山岩風化礫を含んでおり、土壌掘削後の棺内への再埋土である。



第29図 40号支石墓 (SB6) 実測図 (S-1/30)

[出土遺物] 遺物の確認はなされなかった。

—11) 40号支石墓 (SB6) (第29図、図版29)

D地点丘陵平坦部西側の7-4トレンチで確認した。

[上 石] 移動して不明であるが、西側にある長さ1.55m、幅1.15m、厚さ25cm強の玄武岩板状石が有力視される。

[内部主体] 地山面で径60×60cm、深さ20cm強の円形土壌を確認した。土壌底はさらに1段の段差が付いて、2段の掘り込みとなっている。

[蓋 石] 確認されていない。

- [支 石] 確認されていない。  
[覆 土] 茶褐色粘質土である。  
[出土遺物] 黒曜石剥片と削片が覆土中ほどのレベルで出土した。

—12) 41号支石墓 (SB10) (第30図、図版30)

丘陵平坦部南斜面に設定した3-22トレンチで確認した。上石と内部主体の位置関係がかなりずれており、実測主軸を大幅に変更せざるを得なかった。

- [上 石] 長軸1.25m、短軸90cm、厚さ20cm強の玄武岩の板状石で、形状は卵形を呈す。  
[内部主体] 土壌を採用している。検出面で長さ55cm、幅60cm、床面で長さ45cm、幅55cm、深さ30cm強を測り、北側は地山の安山岩に接している。床面は平坦に造作されている。土壌主軸はN23° Eを測る。  
[蓋 石] 蓋石と思われる細長い石材が土壌上に2枚存在するが、位置関係からして判然としない。  
[支 石] 土壌周辺に塊石が存在するが、不明である。  
[覆 土] 安山岩風化礫を多く含む褐色土で、粘性がある。覆土は高級脂肪酸分析の試料とした(第6章第1節参照)。  
[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

—13) 42号支石墓 (SB11) (第31図、図版31)

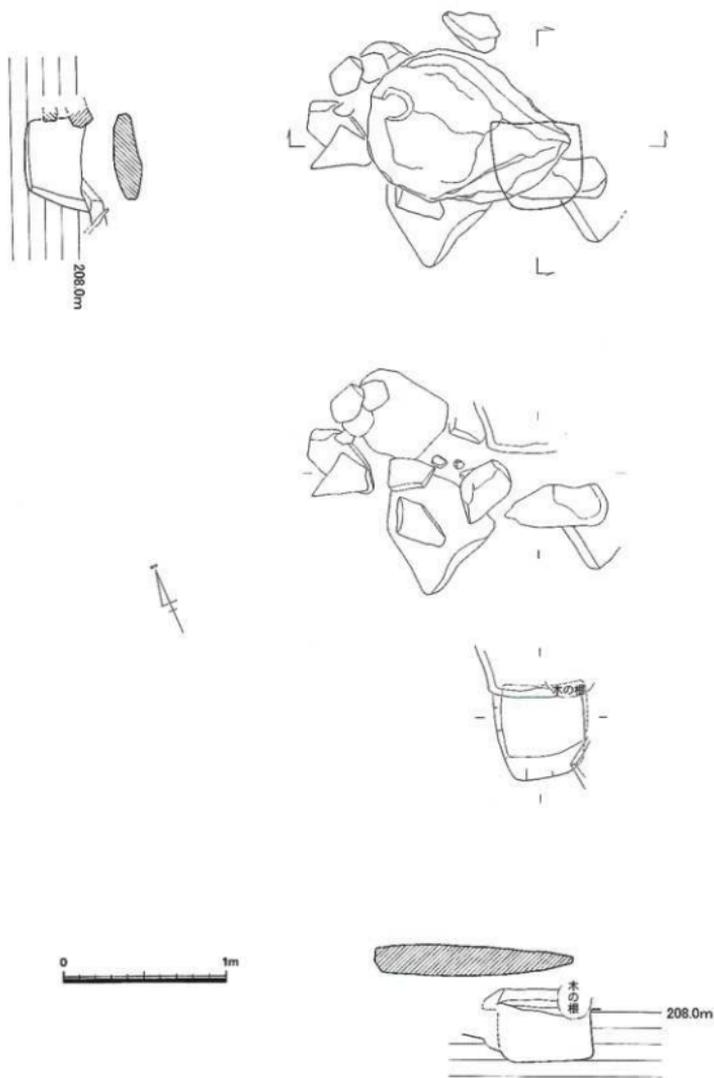
丘陵平坦部に近い南斜面の3-24トレンチで確認した。平坦部南を略東西走する林道を掘削したときかなりの破壊を受けたと見られる。玄武岩削り石を素材とした上石様石材と板状石の存在から支石墓と認定した。

- [上 石] 長軸1m、短軸80cm、厚さ20cm弱の玄武岩を使用している。  
[内部主体] 石材の遺存状態から箱式石棺と思われるが、掘り方の確認はなされなかった。  
[蓋 石] 不明である。  
[支 石] 不明である。  
[出土遺物] 石材散乱部から3個の黒曜石製剥片を検出したが、支石墓に伴うものか不明である。

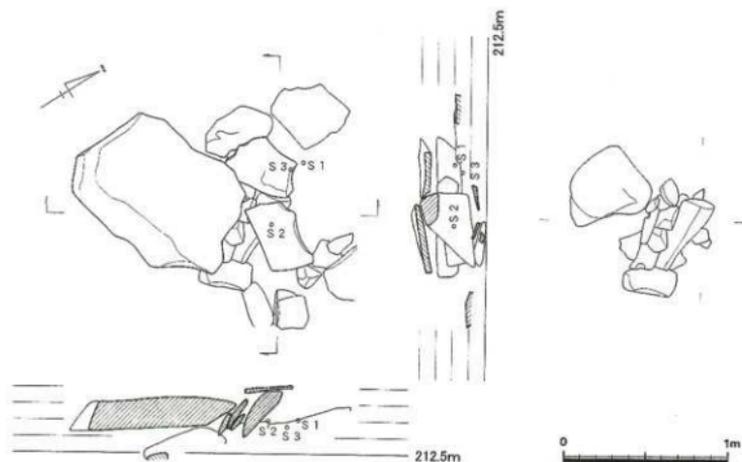
—14) 43号支石墓 (SB14) (第32図、図版32・33)

7-9トレンチに隣接して設定した8-4トレンチで確認した。長さ80cm前後の安山岩塊石が多く見られる地点で、38号・44号支石墓と隣接している。

- [上 石] 長軸85cm、短軸67cm、厚さ20cm強の玄武岩が上石で、内部主体である土壌のほぼ半分を被覆する位置関係にある。このことからほぼ同じ大きさの上石がもう1枚被覆された可能性がある。



第30図 41号支石墓 (SB10) 実測図 (S-1/30)



第31図 42号支石墓 (SB11) 実測図 (S-1/30)

【内部主体】 土壌を採用している。法量は底面57×59cm、上面で67×68cm、深さ20cmほどを測る。床面は西方がわずかに上がっている。また西壁の立ち上りは明確に把握できなかった。土壌上面周縁には安山岩のやや扁平な石が配石されたような状態で確認された。土壌主軸はN71°Wを測る。

【蓋石】 土壌内上面に不整形塊石 (支石3) があり、上面の蓋石と考えられ、かつ支石の機能も果たしているようだ。床面からは約10cm強上位に水平位に存在する。

【支石】 4個の支石を確認した。支石3を除いて、土壌周縁に配されている。

【覆土】 覆土の上位には褐色土が堆積している。この層はD地点に広く分布する表土下の2層と同一層である。下位の層は安山岩風化礫を含む茶褐色度で粘性があり、層の上位にやや大きい風化礫が確認された。

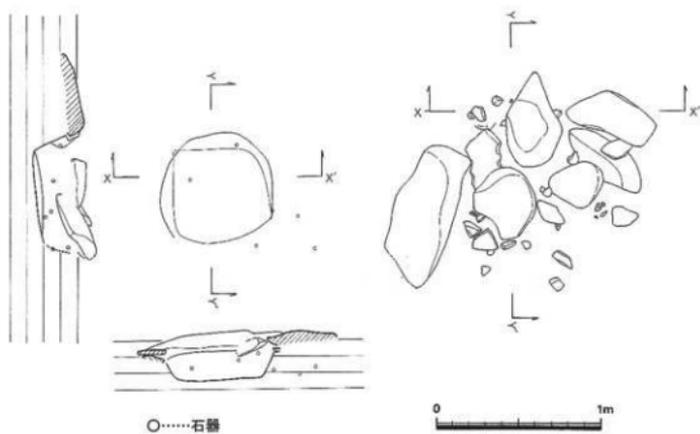
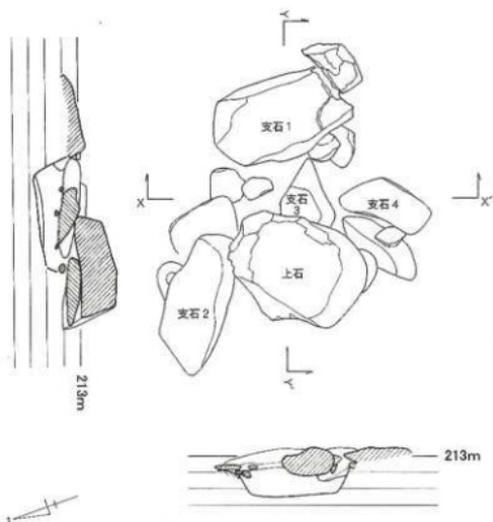
【出土物】 土壌覆土から2点の黒曜石製削片が、また、周辺からも削片が出土している。

#### 一15) 44号支石墓 (SB15) (第33図、図版34・35)

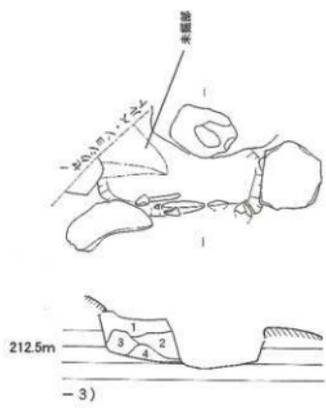
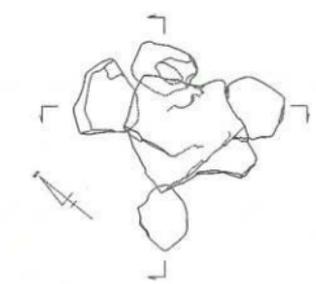
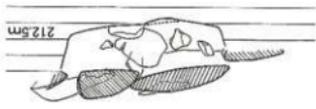
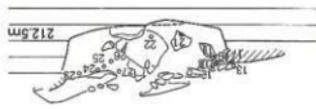
8-5トレンチで38号・43号支石墓に隣接して確認された。

【上石】 長軸75cm、短軸70cm、厚さ12cmの扁平板状石を使用している。北位に傾斜する。

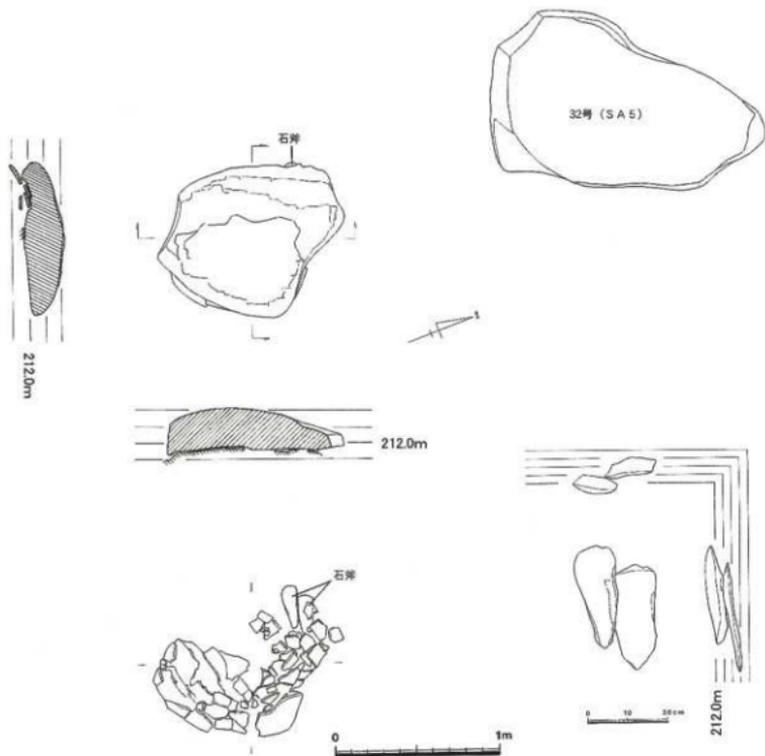
【内部主体】 土壌を採用している。法量は床面で長さ91cm、幅26cm、上面で長さ1m、幅30cm強、深さ27cm前後を測る。形状は長方形を呈している。上面には5cm大から20cm大の安山岩礫が確認された (-2)。南壁は壁面に沿うように安山岩板石を立てているが、北壁には同様の造作は認められない。北壁には床面近くまで傾斜する石材が及んでおり、最初から立石の造作はなかったものと思われる。この石材の上には支石3が乗っており、本来は



第32图 43号支石基 (S B 14) 实测图 (S-1/30)



第333图 44号文石墓 (S B 15) 实测图 (S-1/30)



第34図 45号支石墓 (SB16) 実測図 (S-1/30) 及び石斧出土状況図 (S-1/12)

別の支石墓の蓋石であった可能性を残している。土壤主軸はN39°Wを測る。

[蓋石] 土壌内に位置する支石2の状況からすると、支石が棺内に落ち込んでない状態であり、木蓋の存在が想定される。

[支石] 4個を確認した。土壌内に据えられた支石2以外は上面周縁に配している。

[覆土] 4層に分層できる(-3)。1層は肌理細かな茶褐色粘質土である。周辺に分布する表土下2層と同一層である。2層は茶色粘質土で肌理細かく均一である。3層は茶褐色粘質土で1層より硬く、地山の風化土層に近い。4層は淡黒色砂質土で木の根の攪乱を受けている。

[出土遺物] 土壌内及び周辺から17点の黒曜石製石器が検出された。これらのうち12は土壤上位から出土した石鏃(第69図58)で石鏃分類の10Bタイプに該当する。

—16) 45号支石墓 (S B 16) (第34図、図版36・37)

8-6 トレンチ内で32号支石墓の南2 mに隣接して確認した。

[上 石] 長軸117cm、短軸95cm、厚さ25cmの変形した台形状の玄武岩塊石を上石にしている。

[内部主体] ボーリング調査の結果、土壌と思われる。

[蓋 石] 上石を除去すると、上石下面が剥落した板状石が存在した。また、これとは別に玄武岩の小板状石材が存在し、これが蓋石の機能を果たすものと想定された。このような状況は8-2 トレンチ46号支石墓でも確認されている。

[支 石] 確認されなかった。

[覆 土] 未調査のため不明である。

[出土遺物] 上石下から打製の石斧2本(第77図193、194)が刃部を外側に向けて水平で埋置されていた。石斧は形状のみを整形したもので、実用ではなく儀礼化したものである。

—17) 46号支石墓 (S B 17) (第35図、図版38)

8-2 トレンチ南側で、47号・48号の上石様塊石間の集石部を支石墓として認識した。

[上 石] 移動していると見られ不明である。

[内部主体] ボーリング調査により、土壌を採用したものと想定される。

[蓋 石] 玄武岩の小板状石が蓋石の機能を果たしたものと思われる。この点は45号支石墓(S B 16)と同様である。ほぼ1 mの規模で確認され、レベル下位の石材は滑落して斜めに集積している。集石の厚さは不明である。

[支 石] 確認できない。

[覆 土] 未調査のため不明である。

[出土遺物] 確認していない。

—18) 47号支石墓 (S B 18) (第35図、図版38)

46号支石墓の西側に接する上石を支石墓と認識した。

[上 石] 長軸92cm、短軸62cm、厚さ20cmほどの玄武岩塊石である。等高線に沿って南西側に傾いている。

[内部主体]、[蓋石]、[支石]、[覆土]、[出土遺物] ともに不明である。

—19) 48号支石墓 (S B 19) (第35図、図版38)

46号支石墓の東側に接する上石を支石墓と認識した。

[上 石] 長軸85cm、短軸40+cmの玄武岩塊石を上石にしている。等高線に沿うような状況で傾斜している。

[内部主体]、[蓋石]、[支石]、[覆土]、[出土遺物] ともに不明である。



—20) 49号支石墓 (S B 20) (第35図、図版39・40)

略東西走する7-1トレンチと直行する8-2トレンチの接点部分で確認された。調査時は周辺への攪乱は想定されなかったが、上石状塊石や土壌の存在から支石墓が攪乱された地点と判断した。

[上 石] 長軸105cm、短軸83+cmの玄武岩の楕円形状の塊石を上石としている。現状は若干南に傾斜するものの、ほぼ水平位を保っている。上面は平坦であり、下面は未調査であるが亀甲状を呈する様子を見せることから、上石として機能したものである。現在は東側に反転させられているものと見られる。

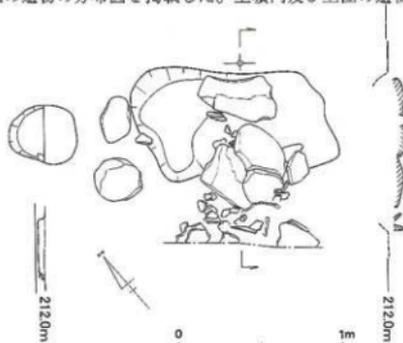
[内部主体] 上石の西側90cmに存在している土壌が内部主体と想定される。法量は70+cm、幅43cm、深さ14+cmを測る。土壌の深さは出土遺物の深度からもう少し深くなるものと想定される。北側土層断面図(-4)に図示している4層を切込んだ斜めの線が、土壌の掘り方の線と想定される。この線のウワバを掘り方上面とすると北小口部で深さ25cm、南小口部で40cmほどを測る。掘り方は南小口部をほぼ垂直に立ち上げ、側壁は明確な床面との立ち上がりを認めず、床面は南方位に若干深くなる傾向を示す。土壌主軸はN42° Eを測る。

[蓋 石] 確認されなかった。

[支 石] 南90cmにある安山岩の扁平な塊石が支石の可能性がある。

[覆 土] 灰茶色粘質土で充填されていた。層中の炭化物を放射性炭素年代測定試料とした(第6章第2節参照)。

[出土遺物] 内部主体である土壌内から石器32点、土器10点、炭化物26点が出土した。石器は石核(第73図161)、石鏃(破片のため型式不明)の外は剥片(第72図136、第73図144)、削片である。土器は10点が出土し、小型壺形土器口縁部(第61図221、225)が出土した。出土深度は前記したように土壌上面の復元を行うとほぼ中位の深度から出土したことになる。他の支石墓に比べ炭化物が多出していることが特徴である。また、-5)に8-2トレンチの北東域の遺物の分布図を掲載した。土壌内及び上位の遺物分布の傾向は上位遺物



第36図 50号支石墓 (S B 22) 実測図 (S-1/30)

が土壌内に包含されることを示しているのに対し、周辺遺物の分布は明らかに相違する傾向を示し、土壌掘削及び支石墓造営によって遺物の分布が乱されたことを示している。

—21) 50号支石墓 (S B 22) (第36図、図版41)

7次調査の7-10トレンチで検出した遺構である。蓋石様石材や土壌の存在から支石墓と判断した。

[上 石] 林道掘削の際移動されたりしく、確認できない。

[内部主体] 土壌を採用している。長軸1.25m、短軸70cm、深さ10cmを測る隅丸長方形を呈す。深さは林道掘削後の車両の転圧により潰されて浅くなっている。床面は歪な状況であるが、転圧されて硬化している。未掘部は今後の確認調査のため現状で保存している。長軸の主軸はN69° Wである。

[蓋 石] 蓋石と思われる石材が、土壌中心部に残っていた。石材は安山岩の扁平な石材を使用している。また蓋石の補材として使用された玄武岩小板石が南方に攪乱されて散在している。東西の蓋石は確認できなかった。

[支 石] 西側の30cm大の安山岩塊石が支石の可能性がある。

[覆 土] 硬く締まった茶黒色粘質土で安山岩風化礫や若干の炭化物を含んでいる。

[出土遺物] 覆土中から黒曜石の削片が10点出土した。

—22) 51号支石墓 (S B 23) (第37図、図版42、43、57)

6次で調査を継続した5次の5トレンチで確認した。

[上 石] 原位置から遊離しており確認できなかった。

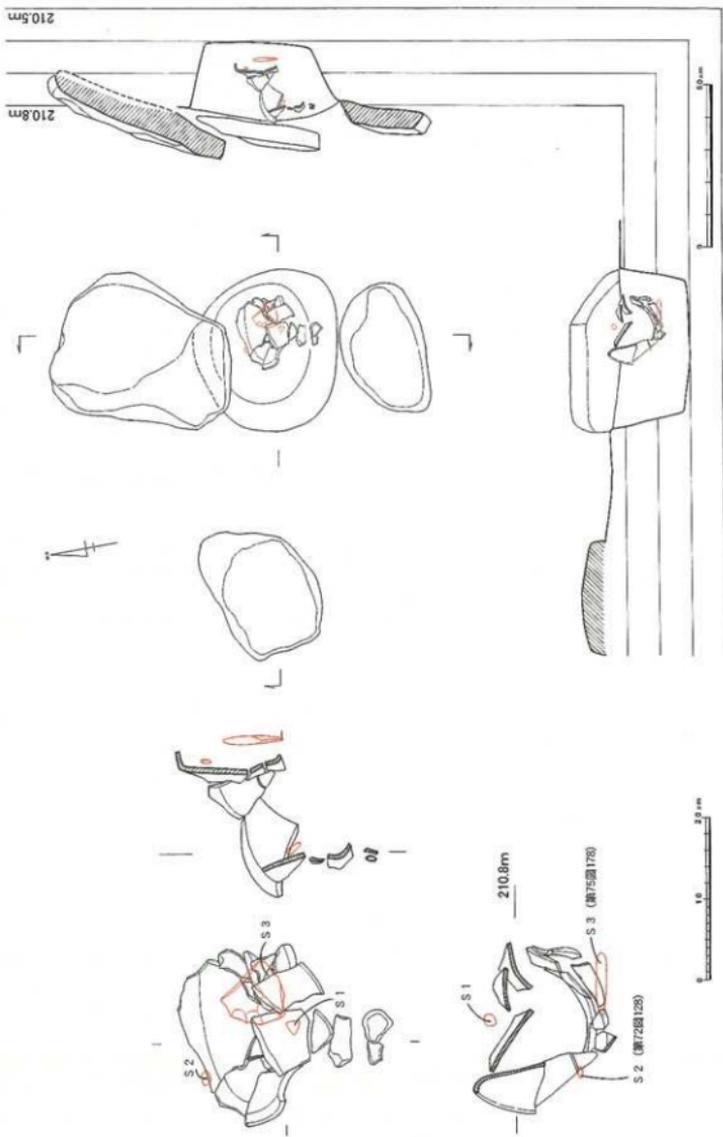
[内部主体] ビット状の土壌を採用し、壺形土器を埋納していた。土壌の量は床面で35×30cm、上面で50×45cmの略円形で、深さは20cm強である。床面には安山岩の扁平な石があり、深さはこれ以上深くなることはない。壺形土器は肩部以下を欠失するもので、内外面に丹塗りを施している。口縁部を南方位に、肩部を北方位に向けていた。口縁部あるいは頸部を閉塞するための造作は確認できなかった。

[蓋 石] 確認されなかった。

[支 石] 土壌の縁に差し掛かる位置で2個の安山岩扁平石を確認した。西側の1個は支石としては不分明である。

[覆 土] 覆土は安山岩火砕泥流の風化土で安山岩の風化礫碎片を含んでいる。

[出土遺物] 棺である壺形土器と、石器3点がある。いずれも土壌内から出土している。土器(第61図219)は床面から10cmほど浮いた状態で出土した。ほぼ水平位の横方向に埋置している。石器は削片(第72図128)が2点、玄武岩製の大型削片(第75図178)が1点床面から4cmほど浮いた状態で、かつ土器の下から出土した。



第37図 51号支石基 (S B 23) 実測図及び遺物出土状況図 (S-1/15、1/6) (赤線は石基)

### 一23) ビット群及び石列 (第38図、図版46・47)

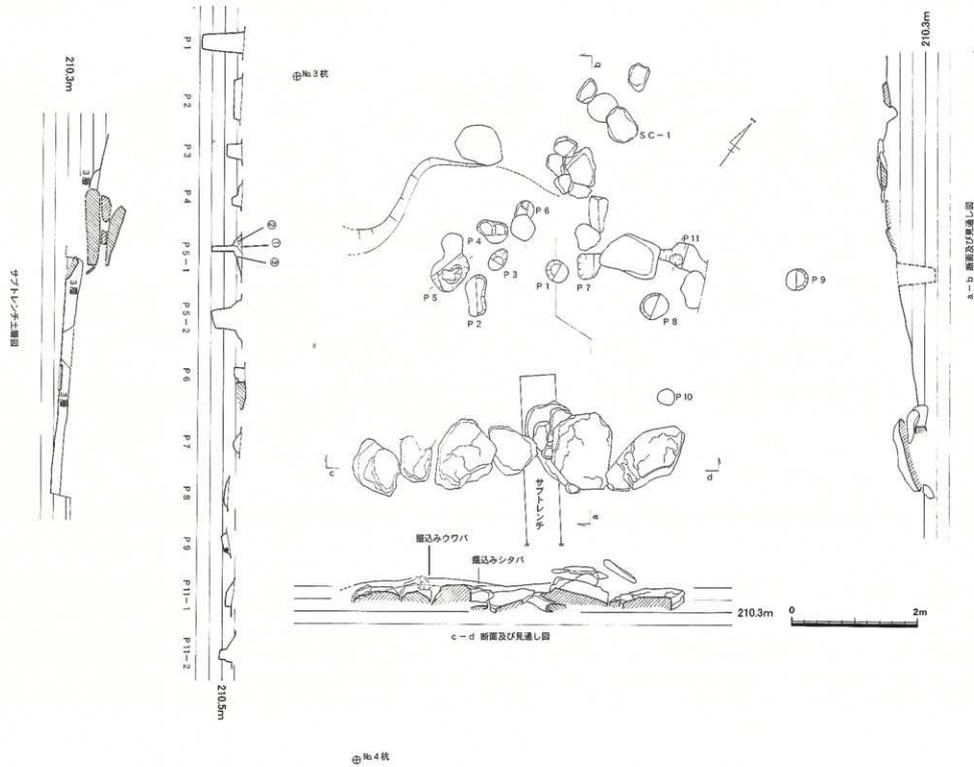
5次調査5-5トレンチで3層の地山(安山岩の火砕泥流堆積層)を整形して段差を設けた部分が確認された。段差の形状は鍵形を呈し、北側に延びるに従いウワバとシタバの間隔が次第になくなり消滅し、さらに3mほど東の地点から1mほど延伸する。南側は5次調査のトレンチ外に展開すると見られたため、6次調査で精査を実施したが、明確な段差の確認ができなかった。この段差の西側でビットが10個(5次調査)、そして石列(6次調査)の遺構が確認された。調査中は「遺構12」として取り扱っており表中では「遺構12」として記載している。

ビットは形状や大きさは不揃いであるが、覆土などに同じ傾向を示すものがあり、同時期に掘削されたものと想定される。この段差部分及びビット上には3層と呼称した地山の火砕泥流の再堆土が被覆している。ビット内からは土器、石器などの遺物が僅かながらも検出された。

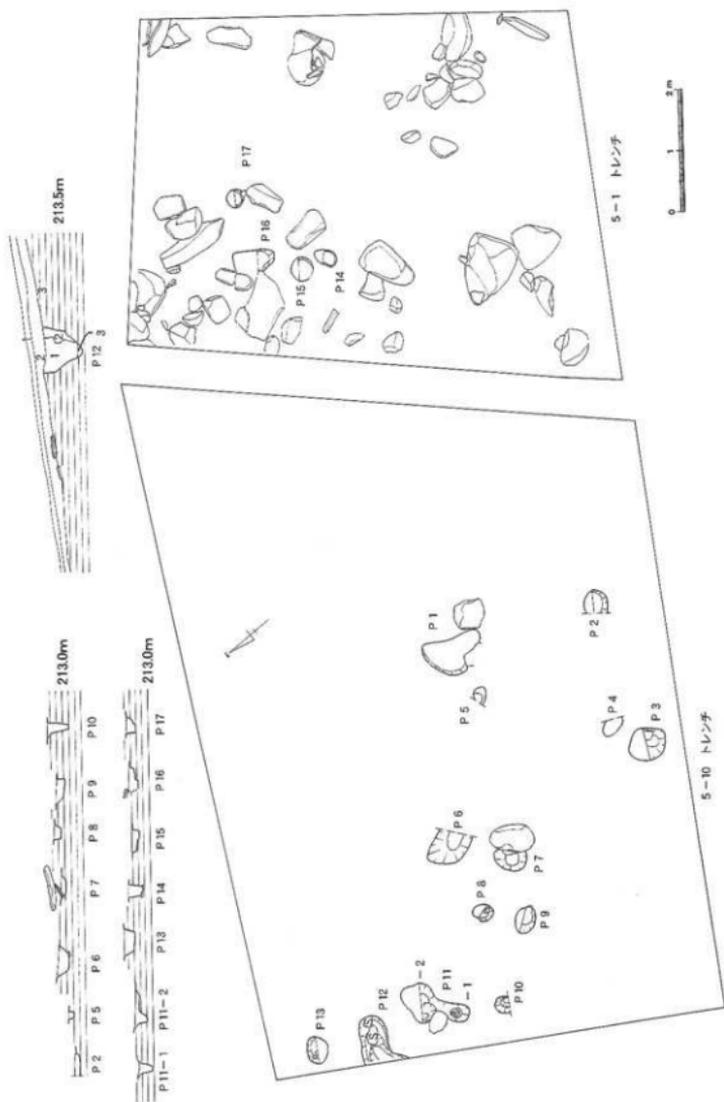
ビットの形状、覆土、出土遺物は以下のとおりである。

- P1…径40cm弱、深さ70cm弱を測る。床面は平坦である。覆土は淡黒茶色粘質土で炭化物を含む。出土遺物は剥片(第73図156、157)が出土した。
- P2…径70cm弱×30cm前後、深さ10cm強を測る。床面は平坦である。覆土は茶褐色粘質土で炭化物を含む。出土遺物は土器(第54図126)が出土した。
- P3…径40×25cm、深さ25cmを測る楕円形を呈し、床面は平坦である。覆土は淡黒茶色粘質土で炭化物を含む。出土遺物は剥片(第73図155、159)が出土した。
- P4…径50cm弱×35cm、深さ15cmの2段掘りとなっている。覆土は淡黒茶色粘質土である。出土遺物は剥片(第73図154)が出土した。
- P5…径95×60cm弱、深さ50cmを測る。断面は2箇所作図したが、どちらも緩い段を持つ2段掘りとなっている。5-1は土層断面部分の図で1は淡茶色粘粘質土、2は淡黄茶色粘質土、3は安山岩風化礫が混じる黄茶色土である。5-2は柱穴状ビットの最大幅部の断面で幅30cm強を測る。掘り込みはほぼ垂直である。覆土は安山岩風化礫や塊石を含む黄茶色土である。出土遺物は深鉢形土器口縁部(第49図6)がある。
- P6…径30cmの円形状を呈し、安山岩扁平礫に掘られている。2段掘りで西側が深く、17cmを測る。床面は平坦である。覆土は淡黒茶色土である。
- P7…40cm強の略方形状で床面は舟底状で、覆土は茶褐色粘質土で安山岩風化礫は含まない。
- P8…45cmの隅丸方形状で深さは5cm強と浅い。覆土はP7と同じである。
- P9…径35cm強の円形状を呈す。深さは10cm程で床面は平坦であるが若干傾きをもつ。覆土は淡黒茶色粘質土で小児拳大の安山岩風化礫を含む。
- P11…地山整形部の法面に掘削されている。径20cmほどで、深さ20cmを測る。床面は平坦である。覆土はP7と同じである。

石列はビットの南東側、段差部分から4mほど離れた位置で段差とはほぼ並行する形で確認された。石列の実測主軸はN53°Eである。石材は1~1.2mほどの玄武岩板状石を2~3段平積みしており、60cm前後の高さを測る。石列は直線となっており、標高の高い方向へ回り込む



第38図 5-5トレンチピット群及び実測図 (S-1/60)



第39図 5-1・10トレンチ、ピット群実測図 (S-1/80)

ような造作は現状では確認できない。石列の基礎部分は地山を一段掘り下げて石材を水平に安定させている。基礎部分の掘り方は布掘り状の掘り込みと想定されるが未掘である。この石列を挟んだ地山の東西の比高は約30cmあり、東側部分も、即ち石列外も造作されている可能性が大きい。この石列と段差を組み合わせた図（第38図）を見ると、石列内側の地山のレベルで30cm弱あったものが、石列ウワバと段差のウワバとでは5cmほどの比高となり、本来一体として機能したことが想定される。また安山岩風化礫層中には風化膜を残す多くの安山岩の石材を包含しており、西側段差部分を造作した折の石材を、石列の基礎付近に一部積み石しているのが見受けられる。このことにより、段差部と石列は同時期に設けられた所産である可能性が高い。そして段差部と石列の間の覆土は安山岩風化礫を含む茶褐色粘質土で、多くの石器や土器を包含していた。石器は石鏃（第70図76）、挟入石器（第71図99）、剥片（第72図133、134）、石核（第75図176）などがあり、土器では壺形の口縁部（第53図113）や丹塗り壺の胴部片（第61図238）が出土した。

#### 一24) ビット群

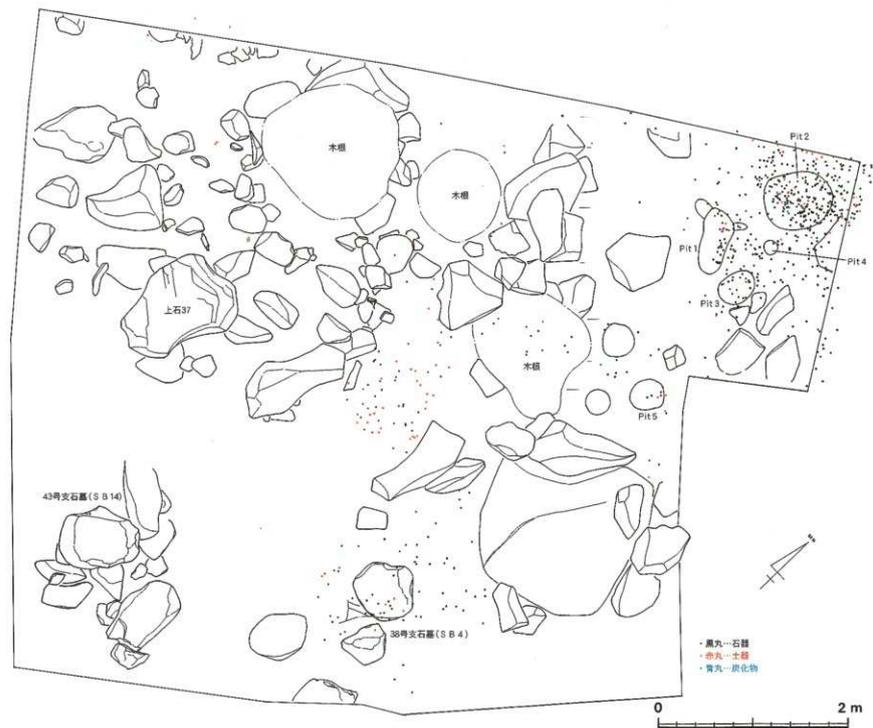
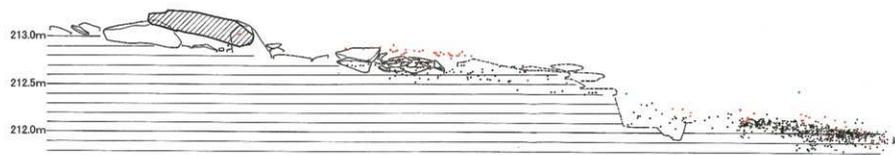
D地点平坦部の5-1・10トレンチ、平坦部から北斜面へ落ちかける7-9トレンチ、平坦部分と南斜面へ落ち込みかける7-10・15・16トレンチ、平坦部東側の8-6トレンチにおいて計33個を確認した。

#### ○5-1・10トレンチ（第39図、図版48）

ビット検出面は3層地山の安山岩風化礫を含む火砕泥流層で確認できる。1トレンチで4個、10トレンチで15個のビットを確認し、5次調査では遺構13として一括して取り扱った。

以下ビットの形状、覆土、出土遺物について概略を記す。

- P1…不整形の楕円形状で、覆土は2層に分かれる。上層は茶褐色粘質土、下層は淡黒色土で、風倒木痕跡の可能性も考えられる。遺物は浅鉢口縁部片（第59図194）がある。
- P2…径40cmの楕円形状を呈し、深さは10cmほどを測る。覆土は淡黒茶色粘質土である。
- P3…径65×55cmの楕円形状で、深さ10cmほどである。覆土は淡黒茶色土である。
- P4…径40×25cmの楕円形状で、覆土は淡黒茶色土である。
- P5…径20×26+cmの楕円形状、深さ10cmほどを測る。覆土は淡黒茶色土である。
- P6…径55×57+cmの楕円形状で、深さ20cmを測る。覆土は上層が淡黒茶色土、下層が黄茶色粘質土で微細な安山岩風化礫を含んでいる。
- P7…径32×30cm+程度の略円形を呈し、深さ10cmほどである。覆土は淡黒茶色土である。
- P8…径30cmほどの略円形で、深さ10cm強を測る。覆土は安山岩風化小礫を含む淡黒茶色土である。
- P9…径45×30cm、深さ15cmほどを測り、楕円形状を呈す。床面は平坦で、南方に偏在している。覆土は淡黒茶色土である。



第40図 7-9トレンチ遺構実測図及び遺物出土状況図 (S-1/40)

- P10…径30cmほどの円形状を呈し、深さは35cmほどである。覆土は淡黒茶色土である。
- P11…2個のピットが合わさったような形状を呈す。-1は深さ27cmほどで円形状を呈す。床面は平坦で、径10cmほどを測る。-2は2段掘りとなっており、深さは上面から25cmを測る。床面は径7cmほどである。覆土はいずれも茶褐色粘質土である。
- P12…西の端で検出したピットで断面に掛っている。形状は不整形で緩やかな段が付く2段掘りとなっている。覆土は1層が淡黒茶色土、2層が淡黒茶色土に3層の小礫を含む。3層は1層を基本に明黄茶色の粒子を含んでいる。遺物は1層から出土している。石器では黒曜石製剥片(第73図141)や削片などが出土した。
- P12のピット断面に5-10トレンチ西側壁面の土層図を掲載している。1層は表土層、2層は茶褐色の弱粘質土、3層は地山層で黄茶色粘質土で安山岩風化礫を含んでいる。
- P13…径45×35cmの楕円形状を呈し、深さ15cm強を測る。覆土は淡黒茶色土で安山岩風化礫が混入している。床面は平坦で、断面逆台形状を呈す。
- P14…径38×25cmの楕円形状を呈す。深さは20cm強を測る。覆土は茶褐色粘質土で床面近くに安山岩風化礫を含んでいる。
- P15…径40cm弱の不整形のピットである。覆土は淡黒茶色土で、微細な安山岩風化礫を含んでいる。
- P16…長さ70cm弱、幅35cmほどの長三角形形状を呈す。床面は2段掘りとなっている。覆土は茶褐色粘質土で、微細な安山岩風化礫を含んでいる。
- P17…径30cmほどの円形状をなし、床面は2段掘りとなる。覆土は淡黒茶色土である。

#### ○7-9トレンチ(第40図、図版49)

5次調査で2トレンチとして設定し、調査を実施した地点である。D地点平坦部から北側へ標高を逐減し始める地点に位置している。このトレンチでは南側で支石墓上石様塊石(上石37)が確認された。この塊石を実測・記録し上石の除去を行い下部構造の精査を行ったが、明確な遺構の確認はできなかった。この石材は長軸1.25m、短軸90cm、厚さ23cmの玄武岩の割り石で、他所から搬入しており近傍に支石墓の存在する蓋然性は高かった。このことにより7次、8次でも調査を継続した。その結果、土壌を下部構造にもつ支石墓が近傍で3基(38号・43号・44号支石墓)確認され、また地山の段差部やピット群を確認することができた。本トレンチでは7個のピットを確認した。検出面は段差状遺構下面位置に相当し、安山岩風化礫を含む茶褐色粘質土である。

- P1…径68×30cm、深さ16cmの楕円形状を呈す。床面はほぼ平坦である。覆土は淡黒色粘質土である。覆土中から遺物を多出する。このトレンチの北側には斜めに傾いた大きな上石様の割り石があり、支石墓の内部主体の可能性もあるが、遺物が多出する傾向にあることから支石墓の内部主体としては留保することとした。
- P2…径72×60cmの楕円形状を呈し、覆土は淡茶黒色粘質土である。覆土中から遺物を多出する。

- P 3…径44×30cmの楕円形状を呈し、覆土は淡茶黒色粘質土である。覆土中から遺物を多出する。
- P 4…径16cm前後を測り、未掘である。
- P 5…径30cm前後を測り、北側は樹根下に入り込んでおり、未掘である。覆土は淡茶黒色粘質土でP 1に似通うが、安山岩風化礫を床面近くに含む。覆土中から黒曜石削片 2点が出土した。本ピット出土炭化物を放射性炭素年代測定試料に提供し、結果を得ている（第6章第2節参照）。
- P 6…少し汚染した淡茶黒色粘質土で、未掘である。
- P 7…少し汚染した淡茶黒色粘質土で、未掘である。

#### ○7-10トレンチ（第41図、図版52）

3個確認した。検出面は3層の安山岩風化礫を含む火砕泥流層で、この面まで下げないと確認困難である。本トレンチ出土炭化物を放射性炭素年代測定試料に提供し、結果を得ている（第6章第2節参照）。

- P 1…径40cm強の円形状で、深さ約5cmと薄くこれは圧密の結果であろう。床面は平坦である。覆土は茶褐色粘質土で安山岩風化礫を含んでいる。50号支石墓の西側に位置している。
- P 17…径25cmの円形状を呈し、床面は平坦である。覆土は淡茶褐色粘質土である。
- P 18…径20cm強の円形状で2段掘りとなる。覆土は淡茶褐色粘質土で安山岩風化礫を含んである。覆土の層相はP 9に似通う。

#### ○7-15トレンチ（第41図）

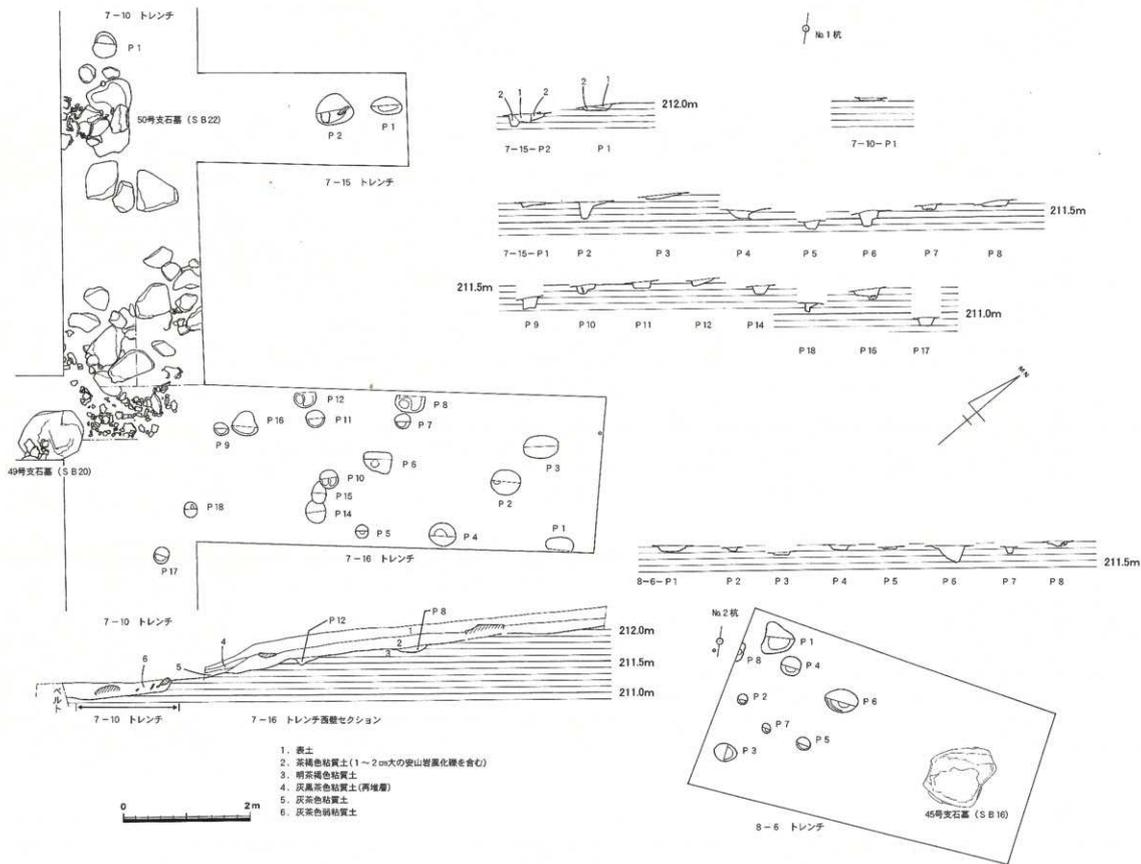
2個検出した。検出面は3層の安山岩風化礫を含む火砕泥流層で、この層まで下げないと確認困難である。

- P 1…径55×30cmの楕円形状で、深さ10cmと浅い。1層は淡黒褐色粘質土である。2層は茶褐色粘質土で安山岩風化礫を含んでいる。
- P 2…径60×50cmの略円形状で2段掘りとなっている。1層は木の根の攪乱で、2層が本来の覆土である。2層は地山層より若干黒っぽい茶褐色粘質土で、2～3mm大の安山岩風化礫を含んでいる。

#### ○7-16トレンチ（第41図、図版52）

15個確認した。このトレンチでも3層地山層まで下げないと遺構の確認は困難である。

- P 1…トレンチ東壁に沿って検出された浅いピットである。長さ40cmの隅丸長方形で、床面は地山に含まれる風化礫の関係で若干凹凸がある。覆土は淡茶褐色粘質土である。
- P 2…47×42cmの2段掘りとなっており、深さ25cm強を測る。覆土は淡茶褐色粘質土で、安山岩風化礫を含んでいる。覆土から黒曜石製削片が1点、土器片1点が出土している。
- P 3…径55×37cmの楕円形状を呈している。深さは浅く舟底状である。覆土は淡茶褐色粘質土



第41図 7-10・15・16、8-6トレンチ、ピット出土状況図 (S-1/60)

である。

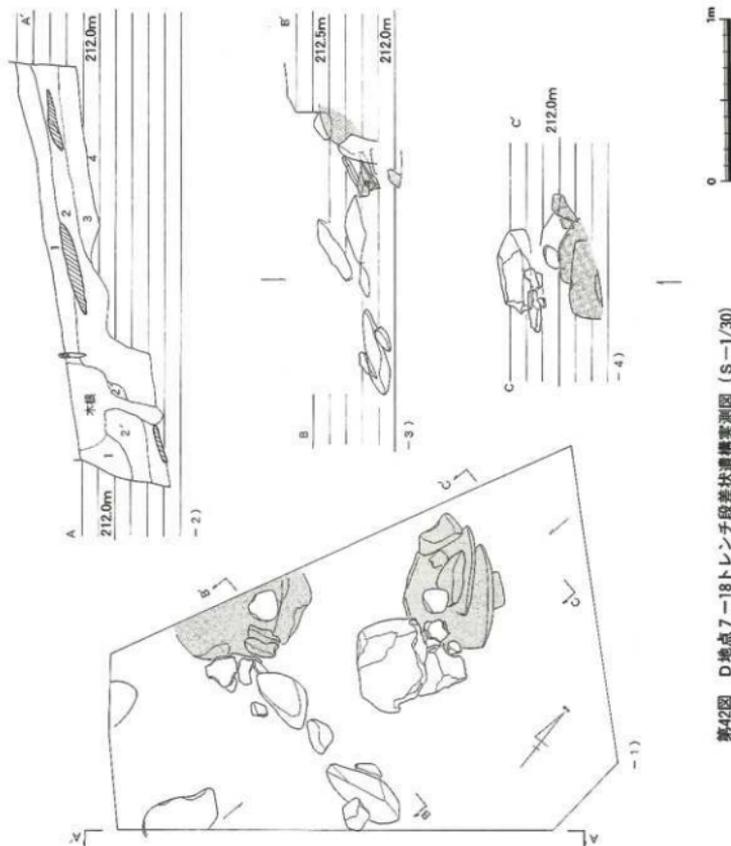
- P 4…径43×40cmの円形状を呈す。床面は平坦で径20cmほどである。覆土は淡茶褐色粘質土で、安山岩風化礫を含んでいる。
- P 5…径25cmの円形状を呈す。床面は径10cmほどで平坦である。
- P 6…長さ45cm強、幅35cm弱の長方形形状を呈す。覆土は淡茶褐色粘質土で、安山岩風化礫を含んでいる。
- P 7…径24cmの円形状を呈す。深さは10cmと浅く、床面には安山岩の石材が残る。覆土は淡茶褐色粘質土である。
- P 8…トレンチ西壁に沿って検出された。長さ45cmを測る兩丸形状を呈すと見られる。2段掘りとなっている。覆土は淡茶褐色粘質土で安山岩風化礫を含んでいる。覆土から黒曜石製削片が1点出土している。
- P 9…径23cmの円形状を呈す。深さ20cm弱を測り、床面は平坦である。覆土は淡茶褐色粘質土で安山岩風化礫を含んでいる。覆土から黒曜石製削片1点が出土している。
- P 10…径28cmの円形状で、深さは10cm強を測る。覆土は淡茶褐色粘質土で、やや黒っぽい色調を示す。覆土から10Dタイプの黒曜石製石礫（第69図63）が出土している。
- P 11…径30cmの円形状を呈す。深さは10cmと浅い。覆土は淡茶褐色粘質土である。
- P 12…トレンチ西壁に沿って検出された。径33cmの円形状を呈し、2段掘りである。覆土は淡茶褐色粘質土である。覆土から土器片が出土したが、細片のため図化できない。
- P 14…径37×30cmの楕円形状でP 15に切られている。深さは13cmほどである。覆土は淡茶褐色粘質土で、やや黒っぽい色調を示す。覆土から縄文晩期と思われる土器片の出土があった。
- P 15…径35×23cmの楕円形状でP 10に切られている。覆土は淡茶褐色粘質土で安山岩風化礫を含んでいる。層相はP 9に似通う。
- P 16…径40cmの不整円形状である。覆土は淡茶褐色粘質土である。覆土から土器片の出土を見たが、細片のため図化できない。

#### ○8-1 トレンチ

7-9 トレンチ北側に設定したトレンチである。北斜面の上位に位置する。傾斜角は15°程で北側に遞減していく。ピットは5個確認した。P 1は土壌状を呈している。いずれも径20cmほどで、覆土は保湿性のある褐色粘質土である。

#### ○8-6 トレンチ（第41図）

8個を確認した。いずれも3層上面での検出で、ピットの覆土は全て似通っている。このことから近接した時期の所産であると想定される。覆土は安山岩風化礫を含む黄茶色粘質土で、これは地山の3層を掘削した後、ピット内に再埋土した結果である。また覆土中には炭化物を含んでいるピットも見られる。このトレンチから確認されたピットは、他のトレンチのピット



第42図 D地点7-18トレンチ段差状遺構断面図 (S-1/30)

と比較して総じて深さが浅く、いずれも上面をかなりの程度削られたものと想定される。

P 1…一辺50cmほどを測る隅丸三角形状を呈している。床面は円形状を呈しわずかにくぼんでいる。覆土内から黒曜石製削片2点と炭化物12点が検出された。本ピット出土炭化物を放射性炭素年代測定試料に提供し、結果を得ている(第6章第2節参照)。

P 2…径17×15cmの円形状を呈し、深さ5cm強と浅い。

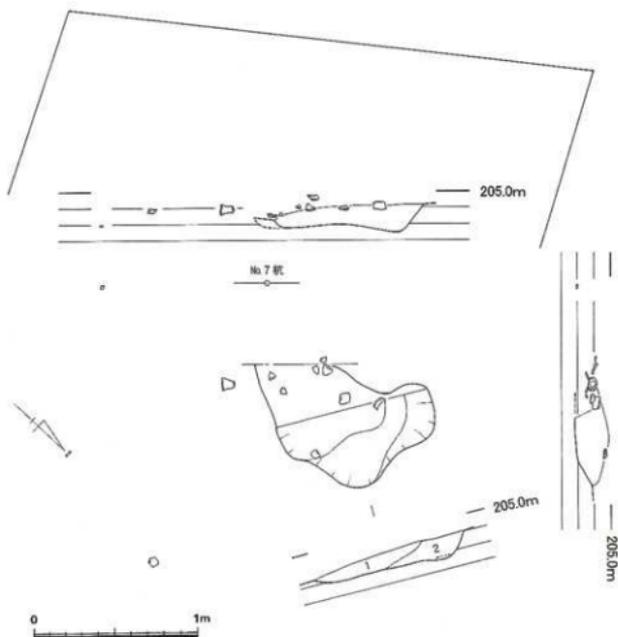
P 3…径35×30cmの楕円形状で、深さは5cm弱と浅い。

P 4…径32×31cmの円形状で、深さ10cm弱と浅い。覆土から炭化物13点が検出された。

P 5…径23×17cmの円形状で、深さは5cmと浅い。

P 6…径53×36cmの楕円形状を呈し、床面は狭小で逆三角形状である。

P 7…径15×12cmの小型で楕円形状を呈す。深さは10cm強を測る。



第43図 5-9トレンチ土壌及び土師器出土状況図 (S-1/30)

P 8…南壁に沿って検出された。長さ32cmほどを測る。

#### 一25) 段差状遺構 (第5・40・42図、図版49・50)

7-9トレンチ北側で地山削り込みの段状遺構(第40図)を確認した。切込み部は2層土から地山の3層である安山岩火砕泥流にかけて切り込んでいる。この切込み部の上端には70~80cmの玄武岩塊石を2~3段積んでおり、これは一部地山の安山岩火砕泥流上、あるいは2層茶褐色粘質土に乗っている。石積み上面はほぼ平坦であり、またピット検出面との比高は30~40cmほどである。この切込み部は7-18トレンチに接続している。この切込み部の機能については不明であるが、遺物の集中(第5・40図)が切込み部より北側、すなわち標高がより低い位置に集中しており、墓域の視覚的な確認などに寄与した可能性を指摘できよう。

また、7次18トレンチでも確認した(第42図)。7-9トレンチの切込みが連続するものと想定される。切込み部は略東西に走り、上面には安山岩塊石を1段配石している。配石はやや西側に高く、東側に低くなっている。配石が乗るのは2層の茶褐色粘質土である。トレンチ断面(-2)で見ると4層とした地山を30cm弱切り落としている。遺物は4層の平坦面にも分布するが、多くは下位の2層、すなわち切込み北側に集中的に分布している。切込み部の北側に

は地山に含まれる安山岩塊石（アミ掛け部）の集石部と玄武岩塊石の集石部が見られる。

安山岩塊石は往時の掘り残しとも推察されるが、玄武岩塊石の集石部は切落とし上面から遊離したもので人為である。土層は1層が表土で上半は削除している。2層は茶褐色粘質土、2'層は2層に似るが安山岩の細礫が混じり2層よりやや黄味色を帯びている。3層は地山の安山岩火砕泥流の再堆積層である。4層は安山岩風化礫層・火砕泥流層で地山である。遺物（第5図）は2～3層にかけて包含され、石器1,678点、土器96点、炭化物31点が出土した。遺物の垂直分布を見ると上・下層に分離されているようで、薄い間層が看取される。土器では若干ながら接合関係が認められ、下位の堆積は短期間の堆積であることを接合関係が示唆している。石器は石錐1点、石核11点、石鏃15点、挟入石器2点、搔・削器12点、二次加工石器1点などで、ほとんどが剥片、削片である。本トレンチ出土の石鏃は2A1点、4A2点、4B1点、5B1点、7B1点(69図44)、8B1点、10A2点、10B2点(69図57)、判別不能4点と各タイプの石鏃が出土している。素材は薄い剥片を使用しており、縄文晩期後半の所産である。土器は5点を図示(第59図195、第62図248・249、第63図281、第64図305)したが、他に棒状の工具で刻目を施した貼付け突帯文の土器が出土している。

#### 一26) 土師器土壙 (第43図、図版47)

D地点東端に設定した5次9トレンチで確認し遺構14と呼称した。標高で205mを測り、斜面の端部に位置し、以東は標高が急激に落ちていく。土壙平面は不整形で西側壁は立ち上がるものの、東側は削平を受けている。深さは約17cmを測る。調査範囲内にはピットなどは検出されず、この土壙の性格や機能については現在のところ不明である。覆土は1層が黒褐色粘質土で土器や炭化物を含んでいる。2層は黄茶色土で粘性は弱い。安山岩風化礫を含み、締りのない土で再埋土である。遺物は1層からの出土がほとんどであるが、東側に若干拡散している。出土遺物は高坏主体の古式土師器（第67・68図）であり、3個体以上の破片が出土している。

### 第5項 E地点の支石墓

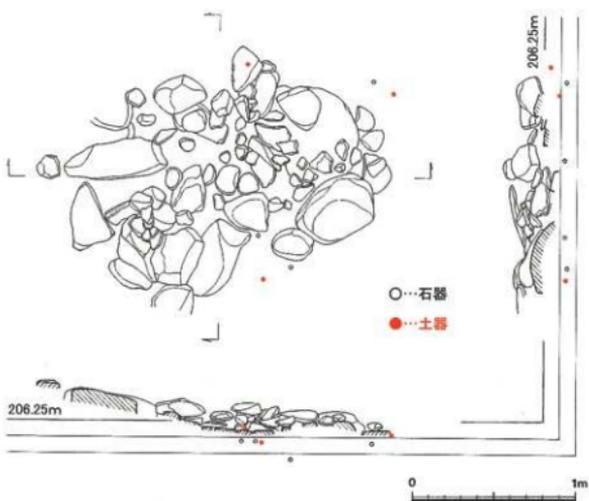
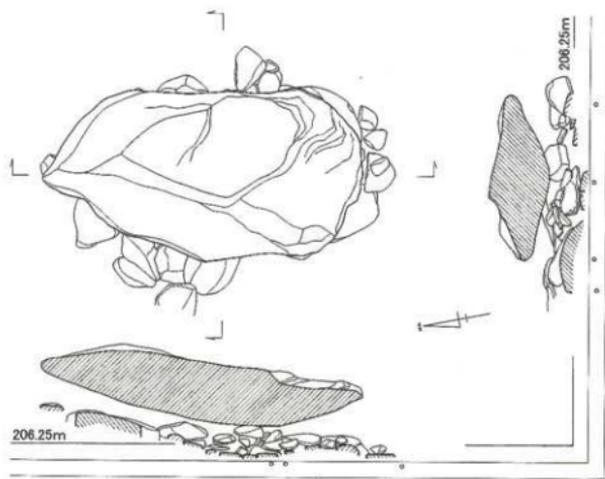
長崎街道の北側、等高線がやや緩やかな奥まった地点をE地点とした。昭和50年の県調査では7基の支石墓が確認され、群集が予想される地点である。3次の調査では30トレンチで52号支石墓の1基を確認した。

#### 一1) 52号支石墓 (SB12) (第44図、図版44)

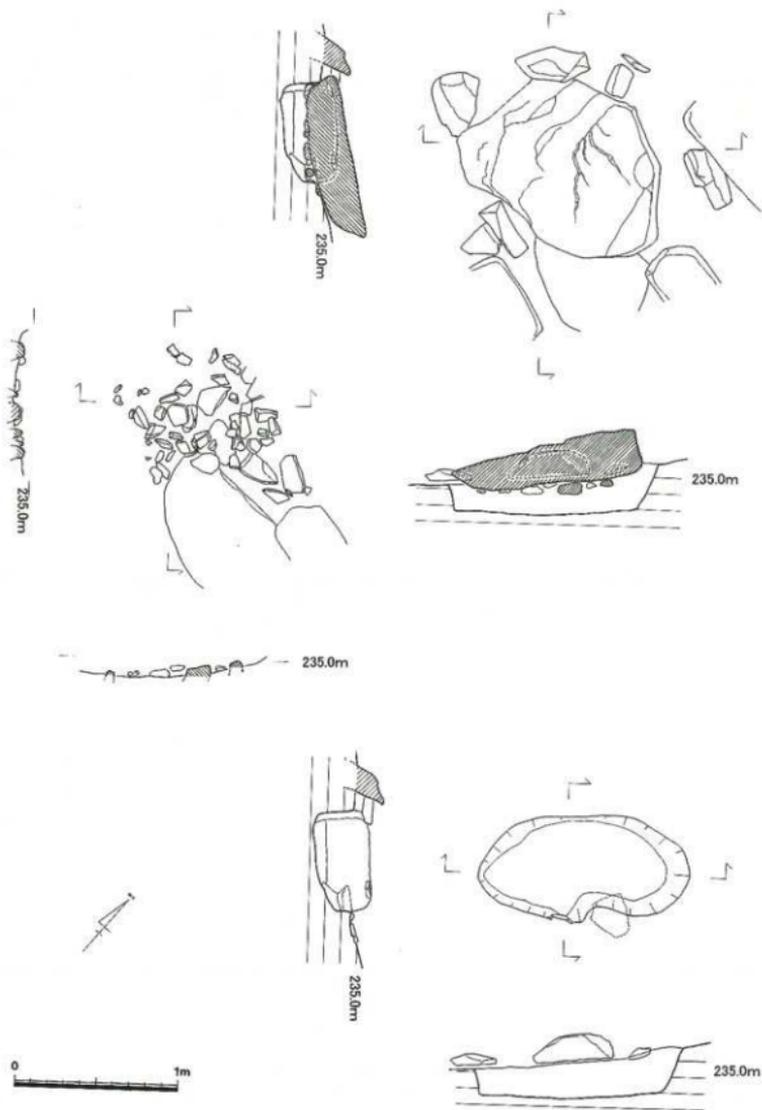
かつて畑として利・活用された地点で、山なりの地形がこの部分で切り崩されている。支石墓はこの開墾地の南側に確認された。

[上 石] 長軸1.97m、短軸1.03m、厚さ35cmの玄武岩の長楕円形石材を使用している。上面は平坦で、下面はやや湾曲している。

[内部主体] 土壙を採用していると思われるが、構造が不分明である。上石を除去すると上石



第44图 52号支石墓 (SB12) 实测图 (S-1/30)



第45图 53号支石墓 (SB 2) 实测图 (S-1/30)

下面に沿うような形で安山岩の塊石が出現する。周縁部には50～60cmのやや大きめの塊石を配し、その内側には小塊石が各々平らな面を上にして敷設されていた。これら石材は一様に中心部に向かって少し傾斜する傾向を見せている。実測主軸はN11° Eである。

[蓋 石] 確認できなかった。

[支 石] 支石の確認は困難で、石材全体で上石を支えるような状態になっていた。

[出土遺物] 塊石下及び周辺から若干の遺物の出土が見られた。塊石下からは黒曜石製の使用痕のある剥片（第72図135）、土器が確認された。また周辺から削器（第71図108）、彫器（第72図117）、刻目突帯文の甕（第65図14）などが出土した。

## 第6項 F地点の支石墓と他の遺構

E地点を登り詰めると、三角点のある風観岳の頂上部に達する。ここは明治初期頃に運動場開設のため削平された部分で、支石墓の残りも極めて悪かった。平坦部に設定したトレンチからは運動場開設を示す銭貨等の出土が見られ、かなりの程度攪乱を受けていることが窺い知れたのである。支石墓は53号支石墓の1基を確認し、また東部分で玄武岩の露頭部分を確認・実測した。

### 一1) 53号支石墓 (S B 2) (第45図、図版45)

風観岳東限で確認された支石墓である。

[上 石] 長軸1.25m、短軸98cm、厚さ25cmほどの玄武岩板状石を上石として用いている。形状は長三角形で、上石長軸と内部主体主軸は振れており若干ずれたものと思われる。上石は西側に少し傾斜している。

[内部主体] 土壌を採用している。法量は上面で長さ1.3m、幅60cm、床面で1.12m、幅45cm、深さ22cmほどを測る。形状は長楕円形状である。床面は平坦である。土壌主軸はN50° Eである。

[蓋 石] 確認できなかった。

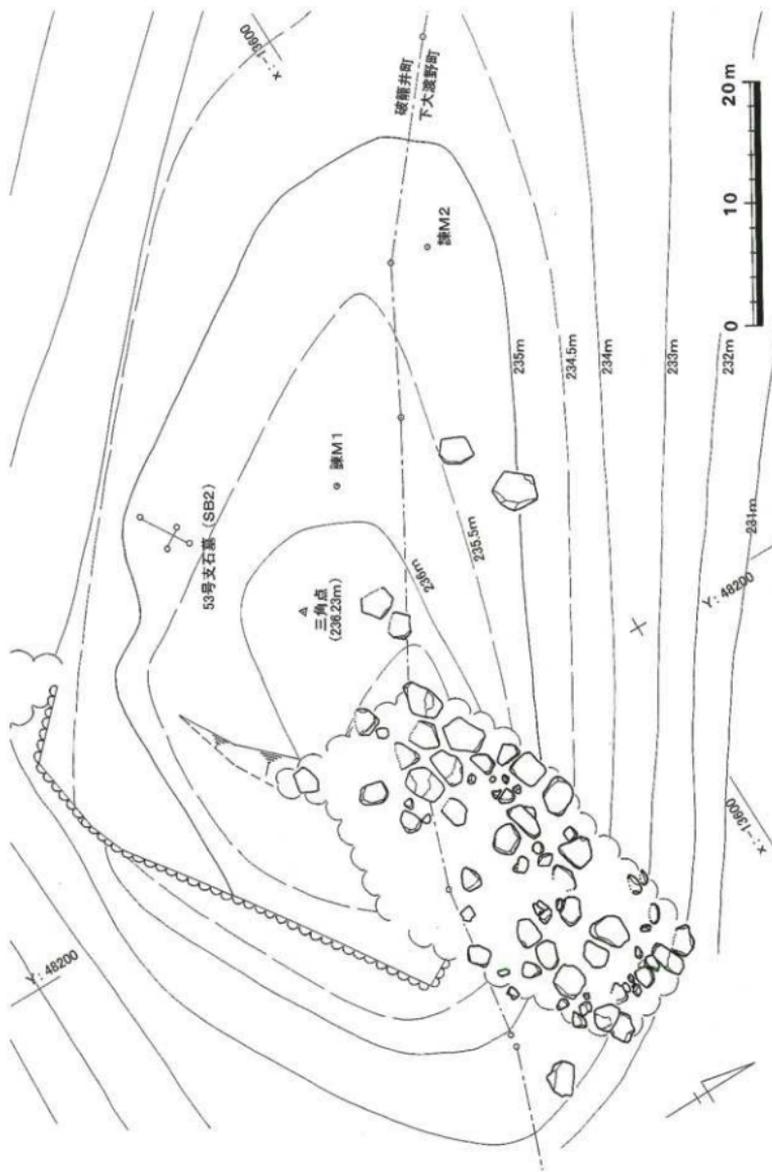
[支 石] 明確な支石の存在は指摘し得ない。

[覆 土] 上石を除去すると安山岩塊石や風化礫が確認され、覆土は地山の再堆積土である赤っぽい玄武岩風化土が、その下位には黒色土が堆積している。

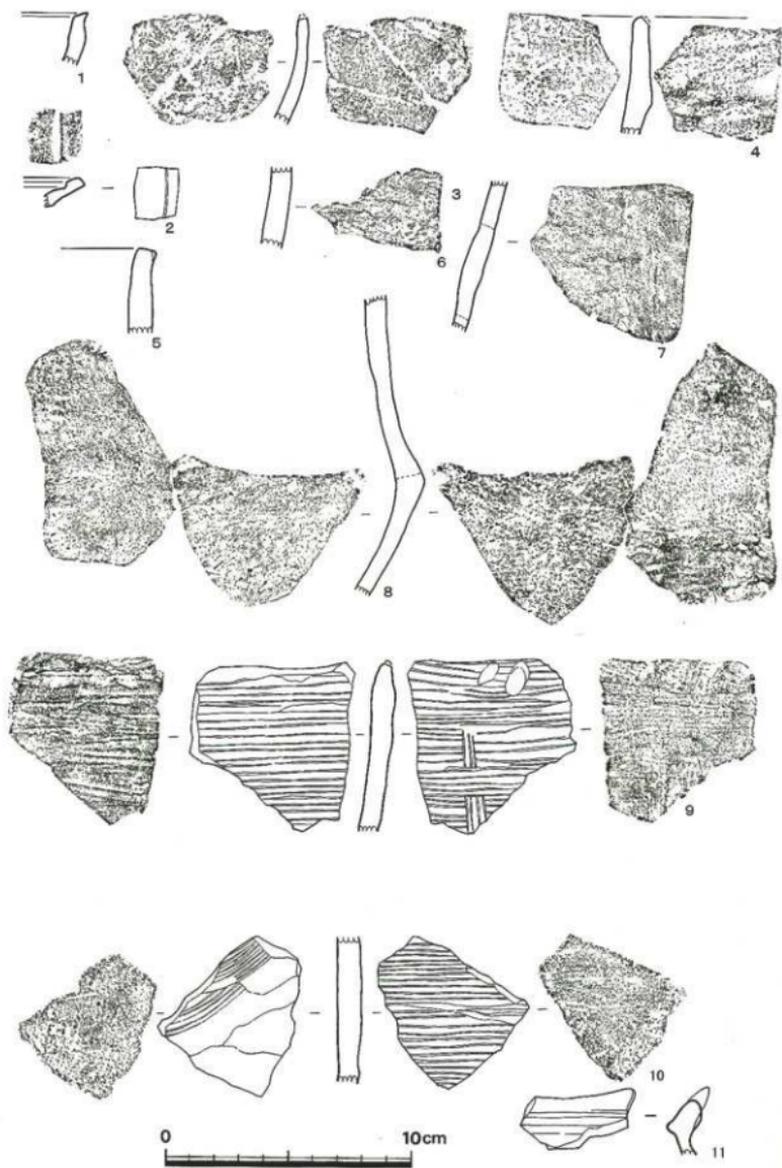
[出土遺物] 覆土は鉋を通して遺物の確認を行った。その結果石器等の遺物の出土は見られず、複数の炭化物が得られた。

### 一2) 玄武岩露頭 (第46図、巻頭・図版52)

風観岳頂部の東斜面の600m<sup>2</sup>ほどに玄武岩の露頭が存在する。露頭は平面形が略円形を呈するものが多く、直径2～3m、高さ1mほどの岩塊として地表面に露頭している。岩塊を1単位として計数した場合30単位ほどの岩塊が確認できる。岩塊の周囲には細かく砕けた板状石が



第46図 日野見岳玄武岩露頭部測量図 (S-1/400)



第47图 A地点出土土器实测图(S-1/2)

存在し、節理面から原材料を剥取した後の残滓物であることを窺わせる。この露頭部の西側には節理面から剥離された、あるいは移動しなかったと思える大きな板状石が確認できる。もとは岩塊として屹立していた岩から、上石用として、あるいは箱式石棺用の板石として剥離・移動した結果、取り残された岩塊とも想定される。本遺跡で支石墓造営に利用された石材は板状に剥離する玄武岩板状石がほとんどであり、また周辺の表層に露出した岩塊を観察しても板状の玄武岩の露頭は認められず、この地点から持ち出された可能性が極めて高い。この石材供給地の所在が、この地に集団墓・墓域を形成するという極めて合理的な理由により、支石墓造営が行われたと指摘できよう。

## 第4節 検出された遺物

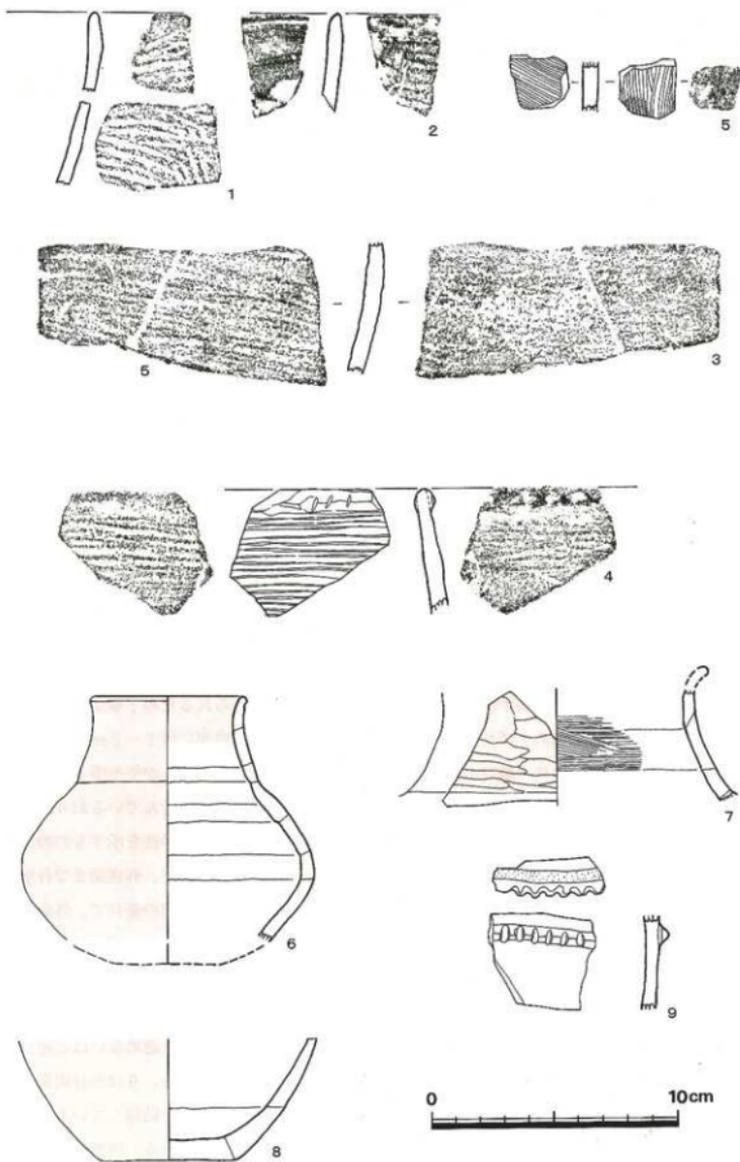
### 第1項 土器

当遺跡で出土した土器の大部分は縄文晩期の土器であるので、まず縄文晩期の土器についてA～Fの地点別に記述することとし、縄文晩期以外の土器・陶磁類やその他の遺物は極めて少数である為、地点別とせず、この章の最後にまとめて紹介することとした。なお土器に関する記述のうち、胎土に含まれる鉱物については、判別しやすい「角閃石」と「雲母」を用いて区別をしているが、出土した土器の7割が角閃石を含む胎土であるので、原則として、「雲母」を含む場合はその旨を記し、鉱物について触れていない場合は角閃石を含む胎土の土器であることを示している。

#### A地点（第47図、第14表、図版58）

縄文晩期の土器と思われる破片が80点余り出土し、そのうち11点を図示した。1～4は2次調査34T（25号支石墓（S B21の上層））出土。1は砂粒を固めたような胎土で表面は剥落している。小型の鉢と思われる。2も小型の鉢のように見えるが、出土した部分には丸みがない。口唇を角ばらせている。胎土は粗い。凸面を上向きにし、浅鉢のように作図する案もあるかもしれない。3は碗形の器形と思われるが口唇部欠損。外面は平滑だが胎土は粗い。4は粗製甕の口縁と思われる。胎土はやや粗く、細かく砕けた安山岩風化礫を含み、風観岳周辺の土を用いたように見える。5は8次10T出土。粗製の甕あるいは鉢の口縁と思われる。口唇部に少し変化を持たせている。条痕等は認められない。6は4次38T出土。外面には条痕の痕跡が残り、内面は磨いたように滑らかである。7は4次24T出土。粗製甕の胴部と思われる。内外とも剥落しているが、外面にはわずかに条痕の痕跡が認められる。内面は比較的平滑である。8は4次15T出土。粗製深鉢の胴部と思われる。当遺跡では比較的大きな破片での出土であるが、内外とも表面の剥落が著しく調整は不明。胎土に角閃石、結晶片岩を含む。9は内外とも条痕がある。外面の条痕は内面に比べやや細かく、部分的にナア消している。胎土粗く、角閃石、結晶片岩を含む。外面下方に炭化物の付着が認められる。4次22T出土。10は4次12T出土。外面には条痕の痕跡がうすく残る。胎土に針状の角閃石を含んでいる。11は2次調査時の表採資料である。複数の突起を持つ精製の鉢と思われる、良く研磨されている。硬質で灰茶色を呈する。

#### B地点



第48图 C地点出土土器实测图 (S-1/2)

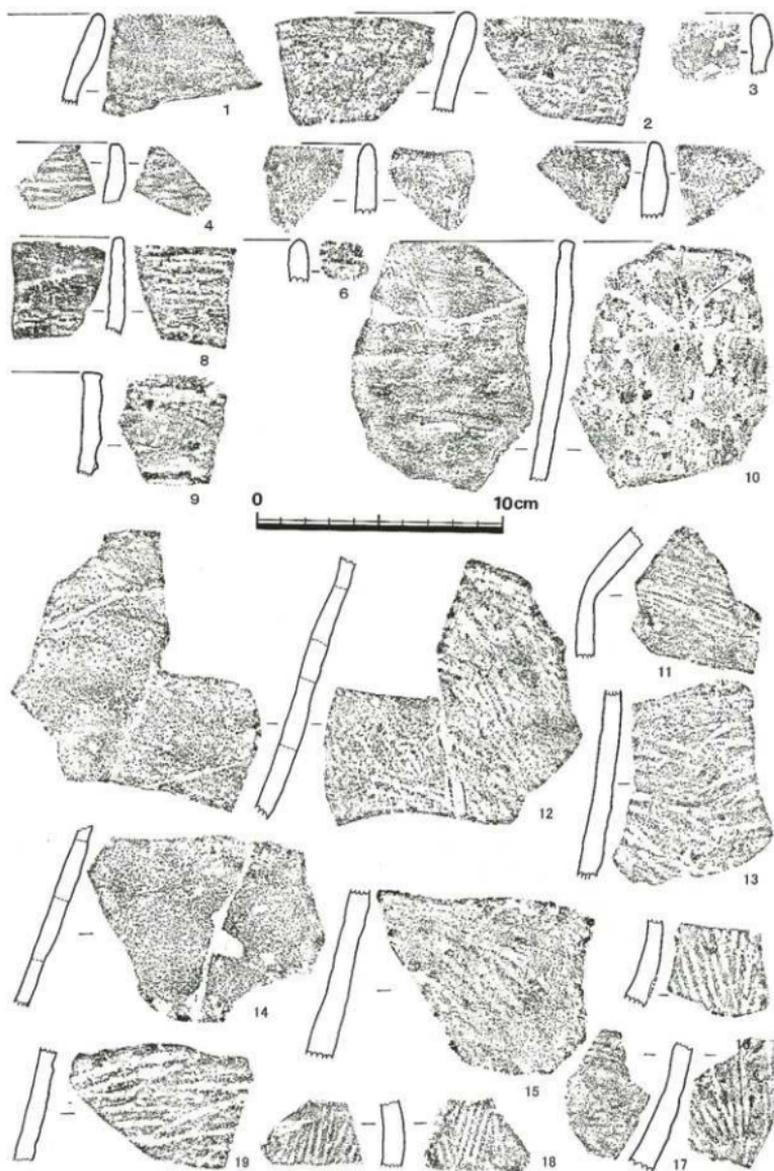
細片 5点が出土したのみで、図化することができなかった。5点とも胎土に角閃石を含んでいる。

#### C地点 (第48図、第14表、図版58)

土器系の遺物は67点出土している。そのうち縄文晩期と思われる土器片は62点あり、図化可能な5点を示した。62点のうち、胎土に角閃石を含むものが52点、雲母を含むものが10点、結晶片岩を含むものが3点あった。雲母を含む土器片の中に丹塗り土器の細片(図なし)が1点存在した。また昭和50年度調査時の出土遺物を6～9に再録した。

1は7次調査19T出土。外面には明瞭な条痕があり内面は平滑である。胎土に石英と結晶片岩(雲母の可能性もある)を含む。内外とも所々に炭化物の付着が認められる。色調は褐色～黒褐色である。2は外面に条痕があり、口縁端部近くはそれをナデ消している。内面は板状の工具で横方向に削ったものと思われる。3次10T出土。3は1次調査5T出土。甕の胴部と思われる破片で内外とも条痕による調整であるが、外面はナデ消されている。また外面には炭化物が付着している。図示していないが、胴径は30cm程度に復元されると思われる。4は同じく5T出土。口縁端に突帯を付け、刻みを入れる。口唇は内側にも少しふくらんでいる。

内外とも横方向の条痕による調整。外面には炭化物付着。5は3次9T出土。細片であるが外面に細かな刷毛目状の調整が認められる。あるいは所属時期不明とすべきかもしれない。6は小型の壺形土器で、底部を欠失する。外面全面、内面口縁部上半部に丹塗りしている。復元口径64mm、頸部径74mm、胴部最大径118mm、復元器高110mmを測る。やや扁平な胴部に、内湾する頸部が付され、さらに外湾しながら外反する口縁部となる。肩部外面にはやや不鮮明な稜を有する。1～2cmの粘土紐を輪積み手法で整形しており、内面に明瞭な輪積みの痕跡を残す。接合は内傾接合である。調整手法は、外面は細粒が器表面に認められるため丁寧なナデ仕上げと思われ、内面は横方向のケズリの後ナデで仕上げている。また内面には1～2mm大の凹部が多く認められ、ケズりに伴う細粒の剥落痕であろう。底部は欠失しているがやや張る傾向を見せており平底風の丸底と想定される。胎土には金雲母や石英、長石粒を含んでいるおり砂質気味であるが、焼成は良好である。8も6と同一個体のような形態・調整手法を示すものの、胴径などの点で異なっており別個体である。底部は54mmを測る明確な平底で、外底面まで丹塗りを施している。内面凹部の痕跡も6と同様である。7は壺形土器の口頸部の資料で、外面に丹塗りが認められるが、内面には塗布しない。粘土紐の接合は内傾接合である。調整手法は外面横方向のヘラミガキ、内面には細かい繊維の束で調整した痕跡を明瞭に残す(図版82)。ササラ状の調整具で、5と同じ原体で仕上げている。胎土は石英・長石・角閃石・滑石・雲母の微細な粒子を含むものの水簸したような粘土で肌理細かく、内外面に細粒を認めないほど精良である。外面は焼成前に丹塗りを施して研磨しており、その後焼成している。9は刻目突帯文の甕で胴部の破片である。外面は貝殻腹縁による調整を行い、その後突帯を貼付している。刻目は棒状の工具による端正な施文で、突帯上下面は施文後ナデで仕上げている。内面は貝殻条痕を残す。突帯下にはススが付着している。胎土は石英粒を含むが精良で、焼成は良好で堅緻に



第49圖 D地点出土土器実測圖1 (1~19) (S-1/2)

仕上がっている。これら6～9は支石墓周辺からの出土で、6・8は7号支石墓上石下、7は9号支石墓下の出土である。

**D地点**（第49～64図、第14～19表、図版59～71）

土器片約3,200点が出土しており、当遺跡全出土量の92%を占める。そのうち晩期として算入したものは3,089点である。

**1）刻目突帯のない甕（深鉢）類及び条痕資料**（第49・50図1～34）

1～4・7は晩期前半の口縁を肥厚させる粗製甕（深鉢）と思われる。1・2・4・7は6次調査6 T出土。3は6次4 T出土。1は細かな砂粒を多く含む。ナデによる調整と思われる。2は外面に条痕の痕跡が残る。3は風化著しく外面の調整は不明だが内面には黒色塗料？の痕跡がある。4は内面に貝殻腹縁によるとと思われる条痕が明瞭に残っているが、外面は条痕をナデ消している。7は風化のため、外面の調整は不明。内面はナデ仕上げと思われる。

5・6、8～10は口縁を肥厚させないタイプで、5・6・8は口唇部を丸く収め、9・10は角張った口唇部をしている。5は7次調査5 T出土。調整はナデと思われ、内面のほうが平滑に仕上げられている。6はほぼ5と同形の小破片で5次5 T（遺構12ビット5）出土。外面は条痕、内面はナデによる調整と推定される。8は7次2 T出土。やや薄い作りで内外とも貝殻腹縁によるとと思われる条痕が認められる。9の口縁は頂部が平坦で、外側へ少しつまんだような形状をしている。残存部下方に細い粘土紐を貼り付けており、鉢類の口縁である可能性もある。5次7 T出土。10は同じ5次7 T出土で断面形状も9とよく似ているが粘土紐の装飾がないこと、色調に違いがあることから別個体と判断される。外面は炭化物の付着が多く、調整はわかりにくい縦方向に擦ったようにも見える。内面は横方向に削っている。11は、大きく外反する頸部のように見える破片であるが、天地がわかりにくい。外面にはやや細かな条痕があり、内面は平滑に仕上げられている。6次6 T出土。

12～27は胴部の破片で、刻み突帯のある甕とそうではない甕の下部が混在していると思われる。12・13は6次6 T出土。12は外面に荒い条痕があり、内面は平滑に近い仕上げである。外面には炭化物の付着が認められる。13も外面に荒い条痕が残る、所々に炭化物の付着が認められる。14は5次5 T出土。内外ともナデ仕上げと思われる。15・16は6次6 T出土。15は外面に荒い条痕がわずかに残っている。16は底部近くの破片と思われる。外面に明瞭な条痕があり、胎土に雲母粉末を含む。17は5次10 T出土。底部近くの破片と思われ、外面は条痕。内面は条痕の後ナデ消し。18は6次4 T出土。内外とも縦方向の条痕が残る。天地不明。19は7次17 T出土。外面は条痕による調整。内面は条痕をナデ消していると思われる。20は34号支石墓（SA7）出土。ただし、34号支石墓は擾乱を受けており、出土した土器が直接34号支石墓に伴うものかは不明。外面はナデ、内面は研磨と思われる。21は35号支石墓（SA8）出土。外面は条痕による調整。内面はナデ仕上げと思われる。22は6次6 T出土。外面は縦方向、内面は横方向の条痕がある。23は7次1 T出土。22と同じく、内外で条痕の方向がほぼ直交する。24・